

高齢社会における公立文化施設の 取り組みに関する調査研究 報告書

平成29年3月

一般財団法人地域創造

◎ごあいさつ

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体との緊密な連携の下に、地域における文化・芸術活動を担う人材の育成、公立文化施設の活性化支援、情報提供、調査研究などの事業に取り組んでいます。

こうした事業の一環として今年度は「高齢社会における公立文化施設の取り組みに関する調査研究」を実施しました。この報告書は、その成果をとりまとめたものです。

著しい高齢化が進む日本において、行政の様々な政策で高齢社会に対応した取り組みが求められています。地域の公立文化施設では、鑑賞事業や参加型事業の来場者、また地域交流事業の対象者も高齢者の占める割合が高まってきており、今後、高齢社会を視野に入れた取り組みがこれまで以上に期待されているところです。この調査研究は、こうした現状を踏まえ、高齢者を意識した多様な事業を展開している公立文化施設を対象に具体的な取り組み事例について調査などを行い、高齢社会に向けて、全国の地方公共団体や公立文化施設の今後の文化芸術面での事業計画の参考となる情報資料などを提供することを目的として、企画されました。

この調査研究では、高齢者を対象とした事業を行っている公立文化施設へのアンケート調査や、アンケート調査の回答施設のうち、東京都中央区、岐阜県多治見市、京都府京都市、熊本県熊本市、静岡県静岡市の5箇所の関係施設等での現地調査、高齢者福祉や公立文化施設等に関する専門家9名を対象に、座談会を実施しました。調査研究に当たり、アンケート調査、現地調査及び専門家座談会では多くの方々にご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

この成果が、地方公共団体や公立文化施設の職員の方々をはじめ、各地域で文化・芸術に携わる方々の参考となり、文化・芸術による創造的な地域づくりに活用されれば幸いです。

平成 29 年3月

一般財団法人地域創造
理事長 板倉 敏和

◎目次

序 調査研究の目的と構成	i
第1部 調査のまとめ	1
1. 公立文化施設が高齢者を対象とした事業を行っている割合とその事業の目的	3
2. 高齢者を対象とした具体的な事業	5
3. 高齢者の施設利用をサポートする公立文化施設のサービス(工夫)	8
4. 高齢者を対象とした事業を取り組む際に、地域で連携するパートナー	10
第2部 調査結果	13
1. アンケート調査	15
(1) アンケート調査の実施概要	15
(2) アンケート調査の集計結果	15
(3) アンケート調査の自由記述	19
(4) アンケート調査票	29
2. 現地調査	33
(1) 現地調査の実施概要	33
(2) 現地調査の概要	34
① 第一生命ホール	34
② バロー文化ホール(多治見市文化会館)	38
③ 京都芸術センター	41
④ 熊本県立劇場	45
⑤ 静岡県舞台芸術センター(SPAC)	49
3. 専門家座談会	55
(1) 専門家座談会の実施概要	55
(2) 専門家座談会の議論要旨	51
① 第1回専門家座談会	56
② 第2回専門家座談会	61

序 調査研究の目的と構成

1. 目的

著しい高齢化が進む日本。行政の様々な政策において高齢社会に対応した取り組みがより一層求められているが、それは文化政策においても例外ではない。実際、地域の公立文化施設では、鑑賞事業や参加型事業の来場者、また地域交流事業の対象者も高齢者の占める割合が高まってきており、高齢社会を視野に入れた役割がこれまで以上に期待されるようになっている。

本調査では、こうした現状を踏まえつつ、高齢者を意識した多様な事業を展開している公立文化施設を対象に具体的な取り組み事例などを調査し、高齢社会に向けて全国の地方公共団体や公立文化施設の今後の文化・芸術面での事業計画の参考となる情報資料などを提示するものである。

2. 調査研究の構成と内容

(1) アンケート調査

公立文化施設における高齢者を対象とした事業やサービスの内容や具体例、運営の現状や動向、課題を明らかにし、高齢社会との向き合い方等について、全国の公立文化施設に有用な情報、資料を把握するため、以下の要領でアンケート調査を行った。

◎ 調査の対象

- 地域創造が平成26年度に実施した「地域の公立文化施設実態調査」において、自主事業・委託事業で「高齢者を対象とした事業を実施している」と回答のあった施設
- 文化庁・平成28年度「劇場・音楽堂活性化事業」の採択施設

◎ 配布・回収方法

Eメールで電子ファイル形式の調査票を調査対象施設宛てに送信、回答入力後にEメールおよびファックスによる返信にて回収。

◎ 主な調査項目

- 高齢者を意識した鑑賞事業
- 高齢者向けの参加型事業
- 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業
- 高齢者の施設利用をサポートするサービス
- 高齢者を対象とした事業の目的
- 地域で連携するパートナー 等

(2) 現地調査

アンケート調査の回答施設のうち、「高齢者を対象とした事業に対して感じている課題や問題点」、「高齢者を対象とした事業の具体的事例」への自由記述による回答内容を参照しながら、地域特性や施設規模、活動内容等のバランスを考慮して、以下の5施設を対象に現地調査を行った。

◎ 調査対象

- 第一生命ホール
- バロー文化ホール(多治見市文化会館)

- 京都芸術センター
- 熊本県立劇場
- 静岡県舞台芸術センター SPAC

◎ 質問項目

- 調査施設の概要
- 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容
- 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果
- 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点
- 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

(3) 専門家座談会

専門家座談会では、高齢者福祉や公立文化施設等に関する専門家9名を対象に、2回に分けて、高齢社会における公立文化施設の役割や方向性、事業や運営に関する留意事項などに関する意見の聴取、交換を行った。

◎ 専門家座談会参加者

新井英夫	ダンス・アーティスト／体奏家
淡路由紀子	グレイスヴィルまいづる 施設長
大月ヒロ子	有限会社イデア 代表取締役
坂倉杏介	東京都市大学都市生活学部 准教授
澤岡詩野	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 主任研究員
白石光隆	ピアニスト
菅原直樹	「老いと演劇」OiBokkeShi 主宰 俳優／介護福祉士
三ツ木紀英	特定非営利活動法人芸術資源開発機構 代表理事
吉野さつき	愛知大学文学部人文社会学科 准教授

※五十音順、敬称略(所属・肩書きはインタビュー実施当時)

◎ 質問項目

- 高齢者を意識した文化・芸術活動(鑑賞型、参加型)の活動事例
- 高齢者にとっての文化・芸術活動の意義、成果や効果
- 高齢者を意識した文化・芸術活動における課題や留意すべき事項
- 高齢社会における公立文化施設の取り組みについての展望や意見

3. 調査期間

平成28年4月1日～平成29年3月31日

4. 報告書の構成

◎ 第1部:調査のまとめ

本調査の全体を通じて、公立文化施設での高齢者に向けた具体的な事業や取り組みの調査結果を整理し、それらを導き出したアンケート調査の結果や、現地調査、専門家座談会での主だった意見などを抽出、掲載した。

◎ 第2部:調査結果

1. アンケート調査

アンケート調査の実施概要と、調査項目ごとの集計結果、自由記述の要約、アンケート調査票をとりまとめた。

2. 現地調査

現地調査の実施概要と5つの調査対象施設ごとに現地調査で聞かれた意見をとりまとめた。

3. 専門家座談会

専門家座談会の実施概要と論点を整理した。また、2回の専門家座談会ごとに、主要な意見を集約・整理した。



第1部 調査のまとめ



1 公立文化施設が高齢者を対象とした事業を行っている割合とその事業の目的

(1) 高齢者を対象とした事業^(注)を公立文化施設が行っている割合

- 高齢者は、入場者、参加者等のさまざまな立場において、事業に関わっている。この高齢者の立場に配慮した企画内容の事業として、公立文化施設は「高齢者を意識した鑑賞事業」、「高齢者向けの参加型事業」、「高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業」を行い、また「高齢者の施設利用をサポートするサービス」を行っている。
- このような高齢者を対象とした自主事業(共催・提携事業を含む)・委託事業を行っている公立文化施設は、平成 26 年度に地域創造で実施した地域の公立文化施設実態調査によると、専用ホールの 17.3%、その他ホールの 12.3%であった。
- 今回の調査では、「上記の調査において、高齢者を対象とした自主事業(共催・提携事業を含む)・委託事業を行っている」と回答した公立文化施設に加え、上記調査時点で調査対象等に含まれていなかったホール等を補完するため「文化庁の「劇場・音楽堂活性化事業」を行っている公立文化施設」を加えて、新たにアンケート調査(以下、「アンケート調査」という)を実施した。
アンケート調査結果によれば、回答のあった調査団体のうち、高齢者を意識した鑑賞事業を実施している団体が 74.6%、高齢者向けの参加型事業を実施している団体が 39.9%、高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業を実施している団体が 33.5%、高齢者の施設利用をサポートするサービスを実施している団体が 74.0%であった。

(注) 高齢者を対象とした事業とは、入場者、参加者等のさまざまな立場で高齢者を特に配慮した企画内容の事業をいうが、高齢者以外の世代を対象に含む場合であっても高齢者を意識する場合には、高齢者を対象とした事業に含める。

(2) 高齢者向けの事業の目的

① アンケート調査における高齢者を対象とした事業の目的

- 高齢者を対象とした事業目的について、アンケート調査によると、「文化・芸術の振興」が約8割を占めるが、「余暇活動の充実」も半分以上の団体が目的として回答し、その他「社会的孤立の防止」、「健康増進・介護予防」などいろいろな目的のためにも事業が行われている(複数回答可)。
 - 文化・芸術の振興 …………… 78.0%
 - 余暇活動の充実 …………… 55.5%
 - 生涯学習の充実 …………… 40.5%
 - 社会的孤立の防止 …………… 28.9%
 - 健康増進・介護予防 …………… 15.6%

なお、「社会的孤立の防止」としては、専門家座談会の中で挙げられていた高齢者の「居場所をつくる」、「人と交われる場所をつくる」、「役割を持ってもらう」等が含まれていると考えられる。

●アンケート調査における公立文化施設が「最も重点を置いている事業」の目的

- 公立文化施設が、上記の事業目的のうち、最も重点を置いている事業目的としては、「文化・芸術の振興」が約 6 割を占めるが、「余暇活動の充実」や、「生涯学習の充実」もそれぞれ約 1 割の団体が最も重点を置いている。

- 文化・芸術の振興…………… 61.3%
- 余暇活動の充実…………… 10.4%
- 生涯学習の充実…………… 9.8%

② その他考えられる高齢者を対象とした事業の目的

高齢者を対象とした事業の目的としては、①の他に、さらに次のものが考えられる。

●他の行政目的

- 行政全般においても、高齢者のためのさまざまな事業が行われているところである。例えば、高齢者の福祉や生きがい対策にとどまらず、高齢者も含めた患者のために、神戸市の「医療＋（プラス）アート事業」^(注)においては、医療そのものに文化・芸術（音楽）を活用しようという取組も行われている。そこでは、高齢者等の生きる力を生み出す、あるいは生きるモチベーションを上げるお手伝いがされている。
- また、例えば、世代間の交流を目的とする事業を行う事例もあった（親子ペアチケット制度。親や祖父母が子や孫を同伴して、来場する機会を増やすため、親や祖父母が自分のチケットと同時に小中高生のチケットを購入する場合には 1000 円で購入できるようにしている）。
- このように、高齢者のための事業として、文化・芸術を幅広い分野で活用しようという試みが行われている。

(注) 地域創造助成採択事業より

●公立文化施設の利用者の増進

- 公立文化施設は、公共の福祉のために建設されているものであり、創造性や多様性に富んだ社会を実現するために存在している。そこで、公立文化施設が、目的どおりに十分に活用されることが重要であり、そのためのベンチマーク（行政指標）のひとつとして、施設への入場者数や観覧者数が挙げられている。
- 一方、高齢者は公的年金の開始が 65 歳からとなっていること、多くの企業などでは定年制が設けられていることから、高齢者は会社等の組織から離れることになるため、その「居場所」や仕事から来る「生きがい」等を失いがちである。そこで、公立文化施設は「居場所」や「生きがい」づくりに大きな役割を果たすことができる。
- このような高齢者のニーズに即したサービスを提供することにより施設の利用促進が図られ、結果として入場者や観覧者の数の増大につながることも考えられる（高齢者と公立文化施設はウィンウィンの関係になれる）。

2 高齢者を対象とした具体的な事業

(1) 高齢者のニーズに対応した事業

① 高齢者及びそのニーズの多様化

- 高齢者福祉施設に入所されている方、自宅におられる方など多様であり、また高齢者そのものの価値観も千差万別であり、そのニーズも多様化している。

② 高齢者のニーズに対応した事業

- 高齢者向けの事業を企画実施する場合には、こうした多様な高齢者の多様化したニーズに対応することが重要である。
- 高齢者が好みそうな事業内容に対して、先入観や固定観念をもつべきではないということも指摘されている。
- 一方、公立文化施設が、高齢者に向けた事業を行う際には、多くの労力と時間がかかるので、それにどう対応していくかという課題も指摘されている。

(2) 高齢者を対象とした事業の内容

① 高齢者を意識した鑑賞事業

- 高齢者を意識した鑑賞事業(必ずしも事業そのものが高齢者のみを対象とするものでなくても、高齢者を意識していればここにいう鑑賞事業である)を実施していると答えた公立文化施設は全体の74.6%とかなり高い割合である(アンケート調査)。
- 鑑賞事業別にみると約半数の団体で古典芸能を行っており、次いで、クラシック音楽・オペラ等が続いている(複数回答あり。アンケート調査)。

- 古典芸能…………… 48.8%
- クラシック音楽・オペラ …… 37.2%
- ポピュラー音楽…………… 23.3%
- 芸術文化の講座・講演会 …… 23.3%
- 演劇・ミュージカル…………… 22.5%

なお、古典芸能の例としては、能、狂言、落語等が考えられる。

- 今回現地調査に伺ったホールのうち、第一生命ホールでは旬な演奏家を音楽ライターの MC 付きで紹介する「昼の音楽さんぽシリーズ」(P.35 参照)を、多治見市文化会館では公共ホールを身近に感じてもらい、来館への敷居を低くしてもらうため1時間未満のコンサートを行う「ふらっとコンサート」(P.39 参照)を、京都芸術センターではナビゲーターが選曲したレコードを解説付きで楽しむ「明倫レコード倶楽部」(P.42 参照)や京都を中心に活動する能楽師により能のさまざまな曲を素謡で上演する「素謡の会『世うつしの鏡』」(P.43 参照)をそれぞれ実施していた。

② 高齢者向けの参加型事業

- 高齢者向けの参加型事業を行っているのは、約4割の団体であり、①の「鑑賞事業」だけでなく、「参加型事業」も有力な手法であると考えられる(アンケート調査)。なお、「高齢者向けの参加型事業」が公立文化施設外で行われる場合もある(アウトリーチ等。次の③公立文化施設外でのサービスの提供を参照)
- 高齢者向けの参加型事業を実施していると答えた施設は全体の 39.9%で、事業の主な内容は、次のとおりである(複数回答あり。アンケート調査)。
 - 高齢者向け講座・教室 …………… 39.1%
 - 高齢者向け実演教室…………… 31.9%
 - 高齢者合唱団…………… 30.4%
- 今回現地調査に伺ったホールのうち、多治見市文化会館では家にあるレコードを持ち寄り互いにレコードを聴きあい、それにまつわる思い出を語り合う「レコードクラブ」(P.38 参照)を実施していた。
- その他、地域創造が助成している事業のうち、埼玉県芸術文化振興財団では、平成 28 年度から「1万人のゴールド・シアター事業」^(注)を行っている。これは、演劇を通じて高齢者の活躍の場を創出し、社会の活性化をめざすものである。60 歳以上の出演者を一般公募により募集し、大規模の高齢者群衆劇の公演を実施する。7月から稽古を開始し、12 月7日にさいたまスーパーアリーナにおいて 1,600 人の出演者のもとで実施された。

(注) 地域創造助成採択事業より

③ 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者と連携した事業

- 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業を実施している団体は全体の 33.5%である(アンケート調査)。
- アウトリーチについては、「鑑賞型アウトリーチ」と「参加型アウトリーチ」に分類されるが、鑑賞型アウトリーチが主流である(アンケート調査)。
 - 鑑賞型アウトリーチ(高齢者施設における出前コンサートなど) …………… 81.0%
 - 参加型アウトリーチ(高齢者施設におけるワークショップなど) …………… 15.5%
- 高齢者福祉と連携した事業については、「認知症患者向けのプログラム」が 5.2%となっている。さらに、「音楽療法、ドラマセラピー、ダンスセラピー」はわずかに 1.7%にとどまっている(アンケート調査)。
- 今回現地調査に伺ったホールのうち、第一生命ホールでは日頃コンサートホールに出向けない介護施設の入所者や通所者向けに行う「介護施設でのアウトリーチ」(P.34 参照)を、静岡県舞台芸術センター(SPAC)では静岡県内の市町村と連携して所属俳優が各地に講師として出向き、高齢者に演劇の楽しさを伝える「高齢者学級での演劇講座」(P.51 参照)や、俳優と一緒に演劇の台本を読む「リーディングカフェ」(P.51 参照)を実施していた。

- なお、アンケートの自由記述の中では、アウトリーチに必要な人材の継続的な研修が必要であるとする意見があった。

3 高齢者の施設利用をサポートする公立文化施設のサービス(工夫)

(1) 公立文化施設のバリアフリー等の状況

- バリアフリー等に対応できているという公立文化施設がある一方、築年数の長い施設のため、バリアフリー等が十分でないとする公立文化施設もある。
- また、バリアフリー等に対応している公立文化施設においても、観客席に階段などがあるので、ソフト対策として、場内に案内係員を配置して対応しているところがある。しかし、そのための十分な人員を確保できるかという課題があるとする意見がある。

(2) 高齢者の施設利用をサポートする公立文化施設のサービス(工夫)の具体例

① 調査対象団体におけるさまざまな工夫

高齢者の公立文化施設利用をサポートするためには、さまざまなサービス(工夫)が行われており、調査対象の4分の3が何らかのサービスを行っている。ジャンル別にサービス(工夫)をしている割合は次のとおりである(アンケート調査)。

●時間的に、アクセスを容易にするサービス(工夫)

- 高齢者の鑑賞しやすい時間帯の公演 …………… 59.4%

例えば、公演を平日の昼間にして、高齢者に配慮している公立文化施設もある。

●場所的に、アクセス等を容易にするサービス(工夫)

- 高齢者への客席案内などの積極的な手助けや協力 …………… 56.3%
- バリアフリーやユニバーサルデザインの推進…………… 48.4%

その他、例えば、駐車場の十分なキャパシティの確保、足の不自由な方への福祉関係のタクシーの活用(送迎)、駅から公立文化施設へのシャトルバスの運行などのサービス(工夫)が検討され、行われている。また、静岡県舞台芸術センターでは、県内の観客のために、公演のチケットを予約すれば、県内の西部地区と東部地区から、静岡県舞台芸術センターへの「観劇バス」を運行し、静岡県舞台芸術センターへのアクセスを容易にしている。

●高齢者の経済的負担を軽減するサービス(工夫)

- 高齢者割引…………… 27.3%

例えば、70歳以上の割引、シニア料金の設定、老人会の一部負担によるチケットの安価な設定などの工夫が行われている。

●職員研修

- 高齢者の手助けや協力などを行うための職員研修…………… 21.1%

② その他の施設利用をサポートするサービス(工夫)

その他、高齢者の公立文化施設の利用をサポートするサービスとして、次のような事例が見受けられた。

- 高齢者にも使いやすい形でのインターネットの活用を検討
- チラシ媒体でも、高齢者を対象に大きな文字を使うなど別途チラシを作成
- 補聴器のハウリング防止案内、日本語の演劇作品における日本語の字幕(高齢者向け)など、聴き取りに支障のある方に対する適切な対応

4 高齢者を対象とした事業に取り組む際に、地域で連携するパートナー

これまでみてきたように、公立文化施設は、高齢者を対象としたさまざまな事業に取り組んでいるが、例えば福祉などの分野での事業においては専門的知識や知見等が必要であるように、地域で連携するパートナーが不可欠である。

さらに、事業を執行するに当たってのマンパワーの面からも、地域で連携するパートナーが重要である。

① 公立文化施設が高齢者を対象とした事業に取り組む際に地域で連携するパートナー

• 公立文化施設が、高齢者向けの事業に取り組む際に、地域で連携する主なパートナーは次のとおりである(アンケート調査)。

- 地域のアーティストや文化活動団体…………… 38.2%
- 自治体の福祉行政分野…………… 35.3%
- 高齢者介護施設…………… 31.2%
- NPO 法人・ボランティア団体…………… 20.2%
- 大学・専門学校…………… 6.9%
- 圏域内・圏域外の文化施設…………… 5.2%

• そのほか、社会福祉協議会がパートナーとなっているところもある(アンケート調査)。

• 現地調査に伺ったホールのうち熊本県立劇場では、高齢者施設や大学等と連携し、教育関係者や医療、福祉関係者とともデイケアセンターや老人保健施設で、演劇、音楽、ダンスのワークショップを行っている。

また、同劇場では作業療法士等と一緒に演劇ワークショップを行いながら、ワークショップの手法を作業療法士に伝えている。

② 高齢者を対象とした事業に取り組む際のパートナーとの連携にあたって留意すること

高齢者を対象とした事業に取り組む際のパートナーとの連携にあたって留意することとしては、アンケート調査、現地調査、専門家座談会を通じて出された意見を集約すると、おおむね以下のとおりであった。

●ネットワークの構築・拡大

• 公立文化施設がパートナーとの連携にあたって必要なことは、まず、組織と組織、個人と個人のネットワークの構築である。いろいろな機会を捉えて、ネットワークを構築し、さらに、このネットワークを広げていくことが重要である。

• 高齢者の要望を把握するため、普段から関わりの深い地域の他団体や他施設と連携することが必要である。

• 高齢者福祉施設とは、ある程度連携が取れているものの、行政(自治体)の福祉部門担当者は定期的な人事異動があったり、経験が浅く現場に疎かったりと、地域的課題の共有を図ることが難しい場

合がある。

●公立文化施設が他の分野に関わる姿勢

- 福祉、医療に携わる人達は、直接、まちづくりにも関わっている、文化・芸術に関わる人達もそこまで踏み込むことが大事である、とする意見がある。
- 公立文化施設は、他の分野に関わっていく姿勢が重要である。

●ボランティアとの連携

- ボランティアは、公立文化施設のサポーターとして、公立文化施設の運営に一定の役割を果たしてきている。また、高齢者の有する地域ネットワークは大きな力となっている。
- このボランティア活動に参加すること自体が、高齢者の自分自身の生きがいづくり等につながる面もある。
- ボランティアが高齢化してきており、若いスタッフとのコミュニケーションやITの活用などで難しい面も出てきている。また高齢者の体調が変化して、業務に対応できない場合もある。一方、手紙などで意思疎通を図る工夫や柔軟な人員シフトなどの工夫をしている施設もある。



第2部 調査結果

1. アンケート調査

(1) アンケート調査の実施概要

① 調査の目的

著しい高齢化が進む我が国では、行政の様々な政策においても高齢社会に対応した取り組みがより求められている。文化政策においても例外ではなく、それにあわせて地域の公立文化施設に期待される役割も変化し、鑑賞事業や参加型事業の来場者、また地域交流事業の対象者も高齢者の占める割合が高まってきている。

こうした現状を踏まえつつ、本アンケート調査では、公立文化施設による高齢者を対象とする事業の内容やサービス、運営の現状の動向や課題、具体例を明らかにし、高齢社会の向き合い方等について、全国の公立文化施設に有用な情報、資料を提供する。

② 調査の対象

- 地域創造が平成26年度に実施した「地域の公立文化施設実態調査」において、自主事業・委託事業で「高齢者を対象とした事業を実施している」と回答のあった施設(269件…①)
- 文化庁・平成28年度「劇場・音楽堂活性化事業」の採択施設(114件…②)
- ①と②の条件の重複は27件、よって調査対象は365件(= (①+②) - 27)

③ 配布・回収方法

Eメールで電子ファイル形式の調査票を調査対象施設宛てに送信、回答入力後にEメールおよびフックスによる返信にて回収。

④ 実施時期

2016年9月6日～10月2日

⑤ 有効回答数・回答率

173件、回収率：48.6%(配布数:356件)

⑥ 主な調査項目

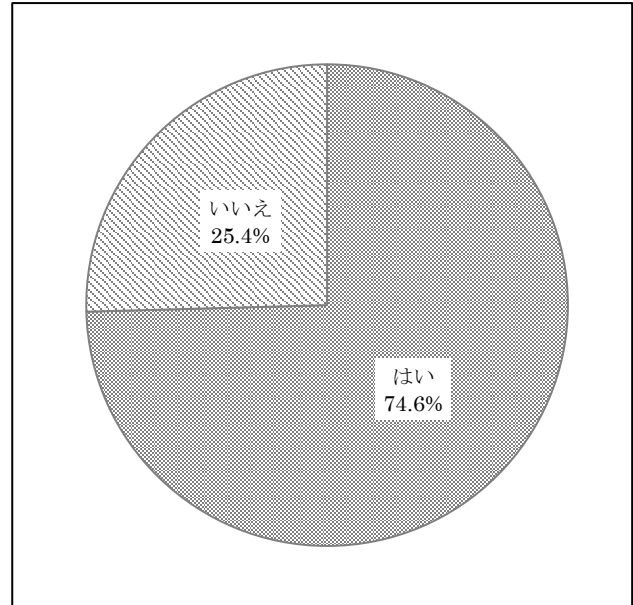
- 高齢者を意識した鑑賞事業
- 高齢者向けの参加型事業
- 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業
- 高齢者の施設利用をサポートするサービス
- 高齢者を対象とした事業の目的
- 地域で連携するパートナー 等

(2) アンケート調査の集計結果

① 高齢者を対象とした事業に関する取組状況

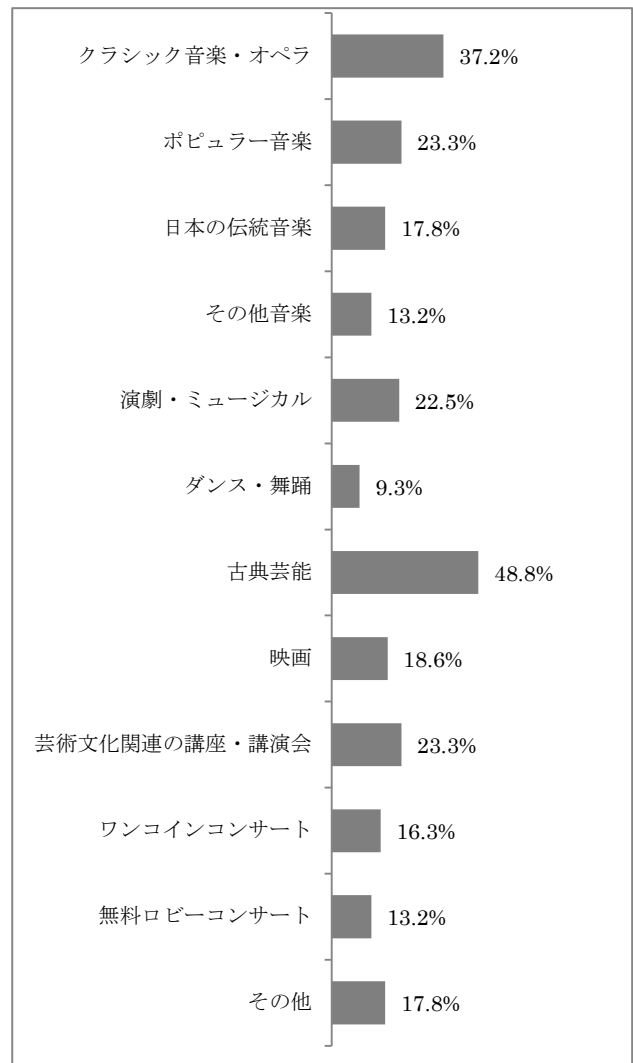
【高齢者を意識した鑑賞事業】

- 平成28年度の自主事業(主催事業、共催・提携事業を含む)で、高齢者を意識した鑑賞事業(高齢者のみを対象としたものでなくても、高齢者の観客を意識した企画を含む)を実施しているかを訊ねたところ、「はい」は74.6%(129件)、「いいえ」は25.4%(44件)と、調査対象の4分の3が高齢者を意識した鑑賞事業を実施している(図1)。
- ただし前提として、調査対象は、地域創造が平成26年度の実施した「地域の公立文化施設実態調査」において、自主事業・委託事業で「高齢者を対象とした事業を実施している」と回答のあった施設が269件(①)、文化庁・平成28年度「劇場・音楽堂活性化事業」の採択施設が114件(②)とを合わせた365件(①と②の条件の重複は27件)であることを留意しておく必要がある。
- 高齢者を意識した鑑賞事業を実施している129件に対して、実施している事業のジャンルを複数回答で訊ねたところ、「古典芸能」が48.8%(63件)で最も多く、次いで「クラシック音楽・オペラ」が37.2%(48件)、「ポピュラー音楽」と「芸術文化関連の講座・講演会」がともに23.3%(30件)となっている。
- 特徴的な鑑賞事業の形式として提示した選択肢である「ワンコインコンサート」は16.3%(21件)、「無料ロビーコンサート」は13.2%(17件)となっている。



【高齢者向けの参加型事業】

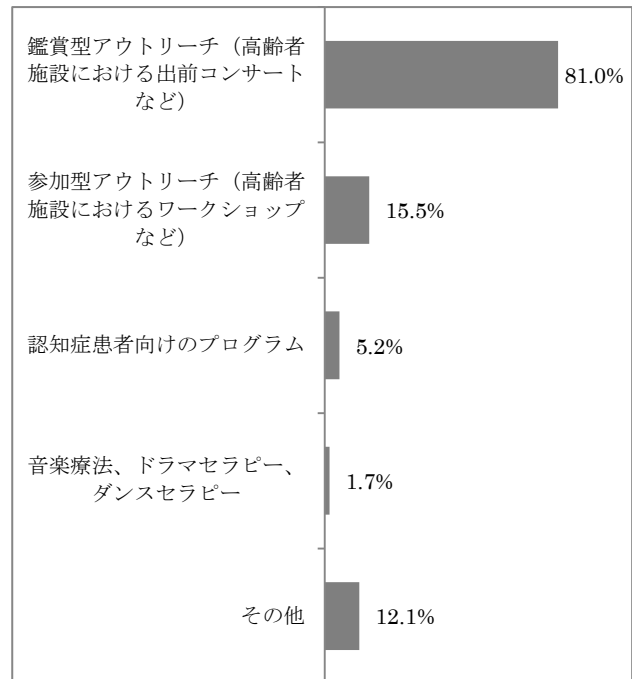
- 高齢者向けの参加型事業(高齢者のみを対象としたものでなくても、高齢者の参加を促す工夫があるものを含む)を実施しているかを訊ねたところ、「はい」は39.9%(69件)、「いいえ」は60.1%(104件)となっており、調査対象のおよそ4割が参加型の事業を実施している。
- 高齢者向けの参加型事業を実施している69件に対して、実施している事業の形式を複数回答で選択していただいたところ、「高齢者向けの講座・教室(生け花、お茶、芸術教養講座等)」が39.1%(27件)、「その他」が36.2%(25件)、高齢者向けの実演教室(合唱、器楽、演劇、ダンス等)が31.9%(22件)、「高齢者合唱団」が30.4%(21件)となっている。



- 「その他」の具体的な記述に多く見られるのが、「文化祭」「文化協会との共同主催による発表公演」といった成果発表型の事業となっている。

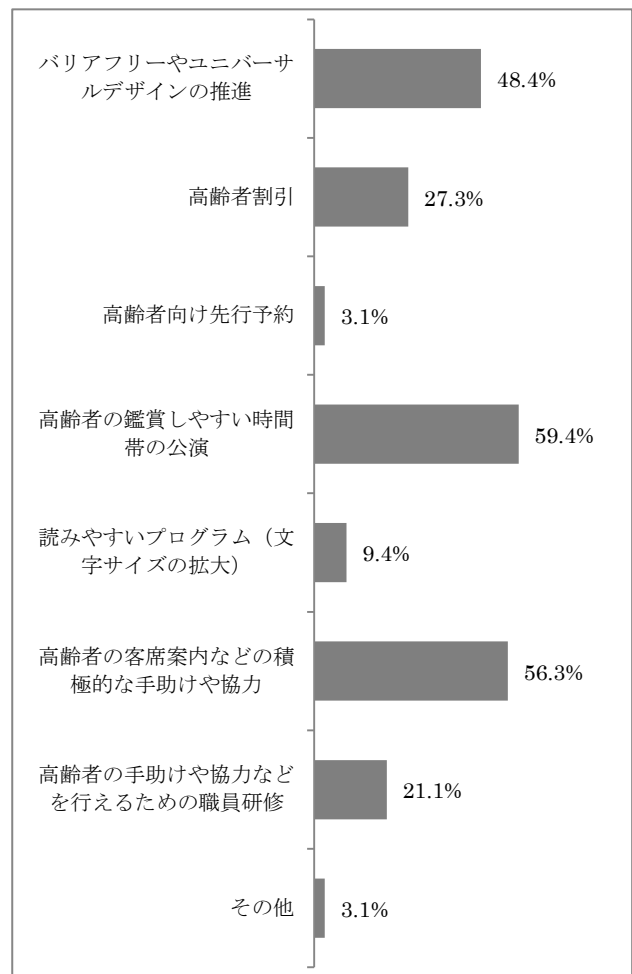
【高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業】

- 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業を実施しているか訊ねたところ、「はい」が33.5% (58件)、「いいえ」が66.5% (115件)で、調査対象のおよそ3分の1がアウトリーチや高齢者福祉との連携事業を実施している。
- 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業を実施しているかどうかの質問に「はい」と回答した58件に対して、アウトリーチや連携事業の形式を複数回答で選択していただいたところ、「鑑賞型アウトリーチ (高齢者施設における出前コンサートなど)」が81.9% (47件)で他に比べて多く、次いで「参加型アウトリーチ (高齢者施設におけるワークショップなど)」が15.5% (9件)、「その他」が12.1% (7件)となっている。
- 「その他」の具体的な記述には、「介護講座」「介護予防関連の出張講習」など、介護に関連する事業の講座や講習が複数見られる。



【高齢者の施設利用をサポートするサービス】

- 高齢者の施設利用をサポートするサービス (例えば「高齢者の鑑賞しやすい時間帯の公演」「高齢者の客席案内などの積極的な手助けや協力」など) を実施しているか伺ったところ、「はい」が74.0% (128件)、「いいえ」が26.0% (45件)となっている。調査対象の4分の3は高齢者の施設利用をサポートするサービスを実施している。
- 高齢者の施設利用をサポートするサービスを実施しているかどうかの質問に「はい」と回答した128件に対して、サービスの内容について複数回答で選択していただいたところ、「高齢者の鑑賞しやすい時間帯の公演」が59.4% (76件)、「高齢者の客席案内などの積極的な手助けや協力」が56.3% (72件)、「バリアフリーやユニバーサルデザインの推進」が48.4% (62件)となっている。



【高齢者を対象とした事業の目的／最も重点を置いている目的】

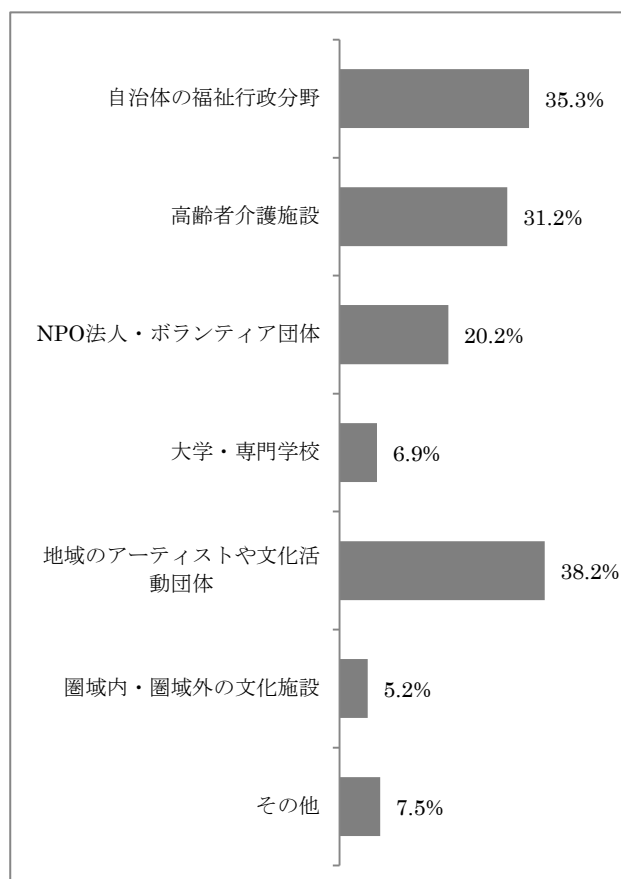
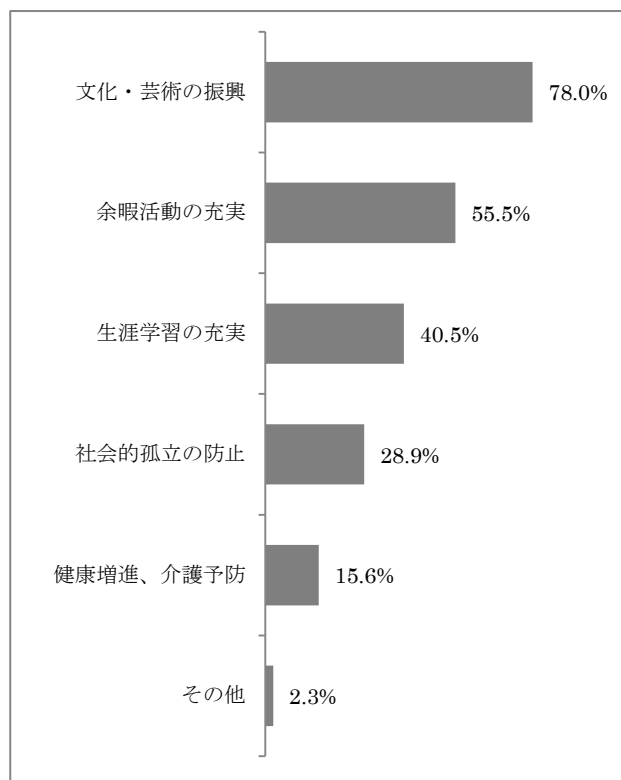
- 高齢者を対象とした事業の目的について、選択肢からあてはまるものを複数選択していただいたところ、「高齢者に文化・芸術の鑑賞や創造の機会を提供するため (文化・芸術の振興)」が78.0% (135件)で最も多く、次いで「高齢者の生活に変化を与

え、余暇生活を充実させるため（余暇活動の充実）」が55.5%（96件）、「高齢者の学習活動や社会参画の機会を提供するため（生涯学習の充実）」が40.5%（70件）となっている。

- 「高齢者の社会参加を促進し、社会的孤立を防ぐため（社会的孤立の防止）」や「高齢者の健康増進、身体機能の維持や介護予防のため（健康増進、介護予防）」といった、文化や社会教育等の領域以外の目的は、「社会的孤立の防止」が28.9%（50件）、「健康増進、介護予防」が15.6%（27件）となっている。
- 前の設問での選択肢から、高齢者を対象とした事業の目的について最も重点を置くものを一つだけ選択していただいたところ、「文化・芸術の振興」が61.3%（106件）で、次いで「余暇活動の充実」が10.4%（18件）、「生涯学習の充実」が9.8%（17件）となっている。

【高齢者を対象とした事業での連携パートナー】

- 高齢者を対象とした事業に取り組む際に、地域で連携するパートナーについて選択肢から複数を選択していただいたところ、「地域のアーティストや文化活動団体」が38.2%（66件）、「自治体の福祉行政分野」が35.3%（61件）、「高齢者介護施設」が31.2%（54件）となっている。「NPO法人・ボランティア団体」は20.2%（35件）、「その他」が7.5%（13件）、「大学・専門学校」は6.9%（12件）、「圏域内・圏域外の文化施設」は5.2%（9件）となっている。
- 「その他」の具体的な記述では、「社会福祉協議会」が複数挙げられている。



(3) アンケート調査の自由記述

① 高齢者を対象とした事業に感じる課題や問題点

◎ 事業計画の必要性、高齢者を対象とした事業予算の制限等

高齢者人口の増加に伴い、事業を推進するための環境整備や計画づくり、他の施設との連携や役割分担等の必要性を感じている施設もある。また、高齢者を対象とした事業に限った課題ではないものの、限られた予算で質の高い事業を提供することの困難さを指摘する意見もある。

- 参加者の減少と高齢化。
- 高齢者の入場者数の確保。
- 限られた費用の中での事業選定に苦労している。
- 予算的制約がある中では、高齢者だけに特化(対象と)した事業展開ができないのが実情だ。
- 求められる事業数と、携わるスタッフ数のバランスが悪く、1事業ごとの内容を突き詰めることができていない。
- 参加型事業よりも演歌、演芸等の鑑賞事業へのリクエストが多い中で、次世代への継承を目指すような文化振興事業を、どう浸透させていくかが課題だと考える。
- 高齢者向け対象事業は人気が高く、ニーズはあるものの、事業計画上開催数が限られているため、更に実施枠を拡大することができない。
- 高齢者層でもクラシック音楽に造詣が深い方もそうでない方も楽しめる内容とすべく、コンサートシリーズ毎にその性格を区別している。高齢者層のみをターゲットにすると市場が縮小するので、世代を超えて楽しめる内容を工夫している。
- 高齢者を対象とした事業は低料金で良質の芸術文化を提供していかなければならないので、補助付事業でないとなかなか実施できない。
- どのジャンルのイベントにしても観客は女性高齢者が中心なので、強く意識したことがないが、劇場に足を運ぶことができない高齢者の方に芸術文化にふれていただく機会をどう提供していけるか模索している。
- 高齢化社会であるこの地域で、この事業を推進するための人材やシニアの方々に参加しやすいような足の確保など、環境設備が絶対に必要だ。これらを解消するために、もっとたくさんの努力をしなければ、と思っている。
- 県立施設や市立の施設、民間の施設が、それぞれに同様の活動を行っており、高齢者にとっては多様な選択肢がある一方、特色を持たせることが困難である。
- 当館で事業を実施する際は基本的に広く一般市民を対象としており、来場者に高齢者が含まれることはあるものの、特に高齢者に特化した事業は実施していない。主な設置目的が青年の文化活動の支援であるため、高齢者をターゲットとした事業推進に積極的ではない部分がある。
- 高齢者向けの事業展開については、社会包摂の観点から、高齢者だけでなく、障害者や被災者などが気軽に芸術文化の恩恵を享受できる場づくりや世代間交流の促進が必要だと考えている。また、施設自身のノウハウの蓄積とともに、他施設等とも連携し、お互いのノウハウや情報の交換を通じて、面的な広がりをめざすことも重要と考えている。
- 個人的には、社会全体での高福祉化政策(税金担保型社会)より、地域住民の意識・感性の充実による地域独自の福祉(幸せを感じる暮らし)構造の追及と構築が重要と考えている。超高齢化社会を迎えるにあたり、文化施設としての「機能」を発揮し、実践していきたい。
- 高齢者のみを対象にした事業について…高齢者の参加を見込んだ事業を計画するのであれば、高齢者だけではなく、それ以前の働いている時から興味を持ってもらえるような事業を計画することで、リタイヤしてからでも気軽に参加しやすいのではと考えられる。

- 事業規模の拡大…昨今の超高齢化社会において、高齢者福祉施設数が多すぎることもあり、事業規模（予算、ヒューマンリソースなど）にかぎりがある中でニーズの全部を網羅することが難しい。
- 機械化が進み、便利になった現代生活では、高齢者の多くは日常生活での作業量も少なく、活動力が低下している。活動範囲の拡大へ向けて、参加費や入場料の見直しのほか、高齢者が参加しやすい魅力ある事業内容を組み立てる必要がある。
- どの事業においても言えることだとは思いますが、とくに高齢者との事業では「継続すること」が非常に重要だと思っている。そのための体制を整備する必要があるが、現在の当団体は未だ充分ではないと考えている。小学校でワークショップをする等の子どもを対象としたプログラムへの知識や経験は蓄積されてきた。しかし、高齢者を対象としたプログラムに必要な知識は未だ大きく不足していると言える。また、高齢者を対象としたプログラムで学びたいと思えるものが未だ少ないとも感じている。
- 当町における高齢者事業は、健康福祉課、社会福祉協議会で主に実施しており、教育委員会としての事業は行っていない。特に高齢者対象という区分けはせず、一般を対象として開催する講座等の事業に高齢者にも参加いただくという形で開催しており、講座への参加は高齢者が最も多いという状況にある。今後は、高齢者の社会参加、社会貢献が重要と感じている。元気な高齢者が社会を支える仕組みづくりが必要であると感じる。

◎ 高齢者の価値観等やニーズの多様化

「高齢者のニーズや価値観が多様化しており、それぞれに対応することが困難である」とする意見がある一方、親や祖父母などが子や孫などを同伴する際に活用できる「親子ペアチケット制度」を導入したことによって世代間交流が促進されつつあるとの意見もある。

- 高齢者の社会的定義が難しい。何歳以上を高齢者とするのか。高齢者扱いをされて迷惑だと感じる人とそう扱っていただきたい人の差が激しい。
- 高齢者の年齢層が60代～90代と幅が広く、参加者全員が楽しめる曲、プログラム内容について試行錯誤している。
- 個人差、男女差…一括りに高齢者と言っても、一人で何でもできる人から介助が必要な人まで個人差がある。男女による参加にも差があり、当館での講座の参加者においても女性が多い傾向がある。
- 事業を実施しても来る人は毎回ほぼ同じ顔ぶれであり、こういった事業に消極的な方や外出に対して腰が重い方などに向けてどういったアプローチをしていけば参加してもらえるのか、頭を悩ませている。
- これまで参加できていた方が、自分で車を運転して来館することができなくなったり、健康面から参加できなくなったりと、本人に参加意思があっても参加できない方が年々増えている。
- クレーマーが多い(例:割引サービスを実施するとそのサービスの拡充を無制限に求めてくるケースもある)。
- 一口に、高齢者と言っても、年齢層・嗜好に幅があり、事業のターゲットを明確に打ち出し推進することが好ましいが、事業数が少ないので、対象から洩れた方への、説明が付かないので、結局、絞りきれずに終わっている。
- 高齢者層の個人差の多様性について。価値観・身体機能・脳活性など…同じ年代においても、高齢者層では個人差が大きくなる。例えば、高齢者向け企画としては、時代物や伝統芸能がよく取り上げられるが、必ずしも高齢者の伝統芸能に対する民度・関心が高いわけではないことがあるように、企画主旨と実際の参加者の意義・満足度の適合性は吟味されなくてははいけない。鑑賞型企画・参加体験型企画・その他いずれにおいても、真に有意義な事業の企画・実施には、「高齢者」という曖昧な先入観を排除し、実態調査や専門機関との連携が重要と考えられる。
- 高齢者を単独に対象とするのではなく、次世代との接点が必要であると感じている。そうしたことから、高齢者が子どもと同伴してコンサートを聴くためのチケット制度として、平成28年度から「親子ペアチケット制度」

を導入した。これは、親や祖父母などが子や孫などを同伴し、来場する機会を増やすために、小中高生のチケットを、親・祖父母が自分のチケットを購入する際に1,000円で購入できるようにした。結果として子ども達の来場が増えた。これを通じて世代間交流が促進されつつあると感じている。

- 当館には学生から高齢者、国内外からの旅行者等も多く訪れるため、案内のバイリンガル化や分かりやすい動線等、高齢者に限らず誰にとってもリーチしやすい環境づくりが必要だと感じる。
- 高齢者向け公演やワークショップを企画しても、趣味・趣向が多様化しており、うまく合致しないことが多々ある。逆に若者を対象とした作曲ワークショップなどに高齢者が集中する例もある。「高齢者だから」という概念ではなく、どんな場合でも高齢者を受け入れる準備を整えることが必要と考えている。また、高齢者施設などへのアウトリーチもアーティストを育成して進めて行く計画。

◎ 福祉行政や福祉分野の専門家、民間団体との連携

行政の福祉部門や福祉分野の専門家、民間団体と文化施設の連携の必要性について記述する意見も挙がっている。事業の内容によっては介護や医療に関する知識やケアが必要になるため、常日頃からパートナーとなる組織や個人との関係を広げ、地域の課題を共有することが重要である。

- 他団体との連携…高齢者の要望を知るために、普段から関わりの深い地域の他団体や他施設と連携することも必要かと感じる。
- 行政担当者との連携の難しさ…高齢者福祉施設とは、ある程度連携が取れているものの、行政(自治体)の福祉部門担当者は定期的な人事異動があったり、経験が浅く現場に疎かったりと、地域的課題の共有を図ることが難しい状況にある。
- 介護保険や医療保険のことが絡んでくるため、文化芸術と違う福祉・医療の専門家との連携をどうしていくか、どのように構築していくか、広げる手段を探っている。
- 認知症介護に演劇の知を生かすワークショップと講演会を実施したが、連携する団体を探すのも手探りなどころがあり、それも必要な段階だとも思えるが、良きパートナーを早く見つけたほうが、地域にとっては良い流れを早く作れる気もしている。
- 当館では、高齢者に特化した事業の展開は行っていないが、デイサービスの施設利用者が、介護者を伴って鑑賞されることはある。認知症の方や、10分おきに体幹マッサージが必要な方など、入場制限を行っていないので、一般の入場者と同じ空間で鑑賞していただいているが、一般の方の理解をより深め、気持ちの上でもバリアフリーが求められる。今後、高齢者や介護が必要な方を差別化しないためのルール作りするには、福祉行政との連携が必要と感じる。

◎ 施設のバリアフリー化

ホールや劇場の建築には階段や段差が多く、動線が複雑な場合が多い。そのため、高齢者の安全な移動するためのエレベーターやエスカレーター、車いす用のスロープが設置されていないことなどを課題に挙げる施設が多い。トイレの洋式化を指摘する意見もある。さらに案内係などのソフト対策についての意見もある。

- 弊施設は動線が高齢者にやさしくない。
- 階段が多い施設構造でバリアフリーでない。
- エレベーターもエスカレーターもない施設なので、上階への案内等に苦慮している。
- 劇場がバリアフリー、ユニバーサルデザインに十分対応していない。
- 施設がバリアフリー化されていないため、積極的な受け入れに応じることができない。
- 高齢者対応は遅れている。ハード面もバリアフリーとなっておらず課題が多い。今後の検討材料にしている。

- ホール客席には階段がつきものだが、階段を上ることが難しい高齢者が多く、階段でけがをされる方が後を絶たない。
- ホールがバリアフリーになっていない。特に2階席へは階段で上らなければならないため、高齢の方を2階席に案内することが大変である。
- 当館にはエレベーターやエスカレーターがないため、足腰の弱い高齢者にとって2階席への移動が非常に不便である。高齢者を対象とした事業を企画するにあたり、館そのものが高齢者に対して利用しやすい設備を有していないという点が課題となっている。
- 開館から間もなく30年となる施設であり、2階フロアに上がる為のエレベーターが無く、随所に段差も多い為、来場者の導線などに注意が必要。
- 築30年弱の会館のため、バリアフリー化が十分ではなく、階段での移動が必要となる個所が多くある。そのため、車イス等での来場の場合、一般のお客様とは別ルートでの客席案内が必要となり、また大・小ホールともに車イス席が最後尾に設置されていることで、苦情をいただくこともある。
- 今後は高齢者事業の予算を計上し実施して行きたいが、事業を実施する前に施設のハード面(トイレの洋式変更、エレベーターの設置等)が整っていないことも大きな課題である。
- 高齢者のみを対象としている事業は少ないが、施設の構造上、大ホールにエレベーター、エスカレーター、スロープ(一部併設)が設置されていないため、高齢の方に階段を上って客席に向かっていただかないといけないハード面の課題がある。
- トイレ、階段、手すりなど施設内のバリアフリー。改修等がすぐには行えないため、現在はマンパワーでケアにあたり、スムーズな誘導に心がけている。
- 和式トイレが多く、高齢者には不便。
- バリアフリーに対応していない施設では、高齢者を対象とした事業をいくら展開しても、階段ばかりでエスカレーターは無い、エレベーターは1機のみ、客席には段差が多く、トイレの殆どが和式では、折角お越しいただき、良い公演を実施しても、安全で快適にご覧いただくことが難しく、ソフト面だけではなく、ハード面の整備が重要であると痛感している。
- 高齢者の方々の施設利用を考慮するうえで、段差の解消(つまづき防止)、照明の照度、トイレの洋式化、水廻りの使用方法等、ある程度、介護的な見地より対応する必要がある。我々の想定を超えた個々の動き方について対応し、様々な箇所で危険要因を察知し、未然に防ぐ気配りが大切になる。
- 施設として必要なバリアフリーは対応できているが、劇場の客席は、舞台を鑑賞しやすくするために、場内には段差が設けられているため、通路も階段になっている。同時に、上演中は客席を暗くしているため、高齢者のお客様の階段の上り下りに不安を感じるが多々ある。これについては、場内案内係員を配置しているものの、それだけでは対応仕切れないこともある。
- 先日の台風で、宮城県の自宅で70代の女性が玄関ドアに左手を挟まれ中指を切断するというニュースがあった。当館施設も、若い世代には特に気にならない場所でも、高齢者にとっては非常に重いドアや、厳しい段差がある部分があるので、高齢者対象事業を行う際の注意喚起が課題。
- 自主事業ではないが、本番中(足元が暗く見えにくい状態)に移動される際に、階段など段差に躓き転倒される方が時々見受けられる。案内係など十分な人員を用意できればいいが、なかなかそうもいかず、安全に催事を進める際の課題になる。
- 本施設は、いくつかの施設が同居する複合施設であり、地上12階の高層施設でもある。特にコンサートホールや大ホールなど、高層階にある施設については、地上階までスロープが整備されておらず、被災時には原則避難階段で逃げていただく必要がある。車いすのお客様については、その避難経路の確保が極めて難しい状況にある。

- 足の不自由な方、杖を利用されている方が、特に高齢者がここ数年極端に増えてきている感じがする。事業時のアンケートでも、ホール内にもエレベーターを設置してほしいとか、手摺りを増やしてほしいのご意見をたくさんいただいている。建物が出来てしまっているのに、改修の内容でできる範囲は限られている。また、工事をするにしても、日程を取ることが大きな工事になればなるほど難しく、長期の休館が必要になるため、市との調整が必要になる。
- 段差の解消やユニバーサルトイレの設置、車いすの貸出を行っているが、高齢者の施設利用は健常者がほとんどであるため、今のところ、高齢者に特化した対応はしていない。しかし、昨年度から職員研修の中で、障がい者の接遇対応や避難訓練に取り組んでいるが、その中で高齢者への対応にも取り組んでいく必要があると感じている。

◎ 交通の利便性(アクセシビリティ)

公立文化施設への交通手段が課題となっている施設も多い。課題を解消するために、駐車場の確保やシャトルバスなどによる送迎、タクシー会社との連携などの仕組みを検討している施設もある。

- 交通の便。
- 当施設までの交通手段が少ない。
- 当施設が遠隔地にあるため、なかなか利用してもらえない。
- 車社会であるが、運転できない高齢者の交通手段の確保が難しい。
- 事業を行う際の交通の不便さ。自らホールに来るための交通手段の確保。
- 公共交通等の充実や平日の駐車場不足(車の乗り合せや家族送迎)。
- 高齢者の事業は駐車場の確保が必然となりますが、駐車場のキャパシティが十分でないため、いつも苦情をいただく。
- 自動車で家族等が高齢者を送迎する際、当館が駅前に立地しているため、1階入口付近に車寄せを作る場所の確保ができず、いったん地下駐車場に入庫してから乗降しなければならず、不便である。
- 地方社会における、高齢者の交通インフラに課題と問題点を感じている。その解決には、地域社会全体の取り組みと地域住民の創造性および実現力が必要。
- 会館までのアクセス(健康な方は良いが、足が不自由な方等の対応)に課題があり、現在は、福祉施設に係りのあるタクシー会社との連携による送迎も試行的に実施。
- 行政合併、高齢化の加速により施設への愛着心が希薄化し、公演などの観客数が減少している。公共交通機関の利便性も低く、送迎などによるシステムが必要とされる。
- 「平成の大合併」で合併した4町からなる地方都市で 広域である。10年たった今も「遠い」という理由で 隣の旧町へは行きたがらない(高齢者事業に限らず)。マイクロバスの送迎も考えてはいるが、不特定多数の来場者に対して把握をどうするかなど問題点も多いため踏み切れていない。
- ホールまでのアクセスが駅から徒歩では少し遠く、また路線バスの本数も乏しいため、自家用車を日常的に運転しない高齢者が単独でホール事業に参加する際に不便さを感じている観客が多い。シャトルバスなどの方法も今後検討していく必要がある。
- 近隣に映画館がないため定期的に開催している。映画上映会は、交通手段がない高齢者に大変よろこばれている。

◎ 高齢者に対応した広報宣伝、事業運営、サービス

高齢者の施設への来場や事業への参加にあたって、特別な留意が必要な事項も多く挙がっている。公演の宣伝、チケット予約、当日運営などで、高齢者との接遇や対応で、細やかな配慮が必要となるケースが具体的に記されている。また、補聴器に関する問題についての意見も聞かれる。

- 当館のホールは、中通路後ろの座席のみ平坦で、あとの座席は全て階段状なので、高齢の方の入場時には注意を払っている。そのホールの形状もあってか、自由席の場合、早くから並べれますので、それも対応策を試行錯誤している。
- 前売り券をお買い求め頂いた方で公演チケットを紛失される方が多い。開場時間の1時間以上前に大勢が集まり会場以上周辺が大変混雑する。
- (来場が) 天気によって左右される。
- 高齢者の参加率が増加するに従い、申込時など当日以外も含めて、思い込みなどに起因するトラブルが増えてきている。軽度認知障害の高齢者の増加などを鑑み、今後、益々職員への心理的負担が高まることに危惧している。
- イベントによっては、高齢者施設から団体で鑑賞に来られることもあり、有料の公演であれば、チケット購入時に車イスや手押し車での入場ではないかを確認して、別ルートからの案内のための人員確保など、前もって準備ができるが、無料の公演は、当日急に上記のような案内が必要となり、対応が難しい場合もある。
- インターネットなどに慣れていないため、情報のリーチが難しい面がある。
- 効果のみられる告知方法が限られていること(インターネットを利用した告知の効果が薄く、紙媒体での告知に偏る)。
- チケット販売において WEB 予約に抵抗がある方が多いため、電話での先行予約・窓口引き取り又は書留にて郵送という販売方法を行っている。先行電話予約は初日に電話が繋がりにくい状況が恒常的にある。
- 公演や事業等の情報を届けるにあたり、インターネットやSNSを用いた手法の割合が年々増加しているが、高齢者を対象とした、もしくは対象となり得る事業等の情報を効果的に幅広く届ける方法について、今後工夫していく必要があると考える。
- 高齢者社会が地方だと進み、なかなか文化会館に足を運んでもらえない。また、PR 方法もどのように周知してもらえるかが、課題である。
- 高齢者観客の観劇マナーについては、同世代の方も含めて問題視することが多い。他の人に迷惑になるぐらいの音量で同伴者とおしゃべりする。客席内で飲食をする。手に持っているモノで音を出し続けるなど。
- 補聴器のハウリング防止案内、階段の上り下りでの介添えなど、接遇面で特別な配慮が必要な例が増えてきた。
- 平成24年度から認知症関連の上映会を実施してきたが、参加者から、「聞き取りにくい」「何を言っているのかわからない」など高齢者の特性に関係する要望があり、26年度からバリアフリー映画を上映して対処している。ただ、講演会などではマイクの音量だけでは対処できないでいる。内容をよりビジュアル化、単純化する必要を感じている。
- 高齢者向けに古い日本映画を上映しているが、古い映画ほど客足が伸びていると感じている。しかし、その様な作品は、音声も悪く画像も暗く、大変見にくい物が多い。古い映画をより良質な音質、明るい画像でお見せできないものかと苦慮している。
- 併設の美術館においても市内、地域の福祉・加護施設等には介助者も含め無料で鑑賞できるように案内をしている。こうした取り組みは、特定の公演に参加するだけでなく高齢者が気軽に立ち寄り交流する場としての役割を果たしていると思われる。

- 組織しているボランティアスタッフにも多くの高齢者が登録しており活動の一端を担っていただいているが、活動から15年以上がたち登録時からさらに年を重ね、若いスタッフとのコミュニケーションや活動におけるウェブサイトの活用などでしばしば難しいと感じる点が出てきている。

◎ 鑑賞事業における課題(時間帯、価格設定や割引制度)

高齢者を対象とした鑑賞事業では、なるべく足を運びやすい開演・終演の時間帯に設定している施設がある。高齢者も施設へ来やすいように、高齢者割引料金やワンコインコンサートなどを設定する一方で、経費について課題に感じている施設もある。

- 現在、文化・芸術事業は、多くの高齢の方々に鑑賞者としてご参加いただいている。今後とも、様々な機会を活用し、多彩で質の高い、文化・芸術を提供していきたいと考えている。
- 高齢者向けとして企画している平日日中の公演以外のクラシック音楽や演劇公演なども、観客の高齢化が進んでいることはホールとして大きな課題だと認識している。
- 高齢化が著しい地域のため、鑑賞型事業を中心に高齢者を対象とする事業を中心になっている。友の会の年齢構成も50～70歳代が中心となっている。
- 年々高齢者を対象とした事業について、来場者が減少してきているように思う。
- 高齢者の方が出かけやすい時間帯が限られているため、平日の夜間の公演や事業が難しくなっている。
- 本番時間が夜になってしまうと内容云々に関わらず来場してもらえる可能性がかなり減ることから2回公演が前提となっている歌謡コンサート系が収支の面から実施が難しい状況となっている。
- これまで、高齢者のみを対象とした事業への取り組みは行っていないが、ここ数年間で、来場者の高齢化を感じる場面がある。アンケートでも、「夜公演や冬場の公演は、足元がよくないため来場しにくい」というようなお声が見受けられることから、マチネの公演や平日昼間のランチタイムコンサートを設けるように取り組んでいる。このほかにも、高齢者も来場しやすい工夫があれば知りたい。
- 当団体はホール内のクラシック音楽主体の主催公演とホール周辺への教育施設や介護施設に音楽をお届けする活動を行っている。クラシックコンサートの聴衆はほとんど65歳以上のシニア層がメインとなっており、ファミリー向けコンサート以外はおのずと高齢者層をターゲットとせざるを得ない。開催時間を夜から昼にシフトしたり、負担しやすいシニア料金の設定や価格自体を低めに設定している。
- 課題が生じる程沢山の事業を開催しているわけではないが、一般向けの平日夕方以降の催しなど高齢者の方が来館するのを避ける傾向になっている。このため土日祝日以外の催しについては世代間毎に分断されている状況である。
- 今まで夜間に行っていた事業を、近年昼間に時間帯を変更することが多くなってきた。これは来場者のうち、高齢者の割合が増えてきたことと関係がある。ワンコインコンサートを実施すると、平日の昼間でも、相当数の集客が見込めるようになってきた。来場者のアンケートには「年金生活者のため、普段の公演には来れないが、今回は500円だったから足を運んだ」とあり、時間的都合だけではなく、金銭面での優遇を期待する高齢者の存在がわかる。
- 高齢者を対象としていないが、伝統芸能(歌舞伎公演)、ワンコインリレーコンサートは、ご年配が多く来訪される。そのため、昼の時間帯を希望される(夜が怖い、交通手段がない等の理由)。若い方は仕事帰りを希望される。そのため、ワンコインリレーコンサートが昼の時間に変わったので、苦情のお電話(夜に開催希望)をいただいた。
- 高齢者対象にした割引料金導入による経費負担のリスク。
- クラシックに限らず様々なジャンルの高齢者向けの演奏会を企画、実施しているが公演委託料に見合うようなチケット販売につながらないこと。

- 高齢のお客様が参加しやすい料金設定。500円など安い料金で良質な体験をしていただけるよう努めているが、事業を継続するには経費も必要であり、費用の捻出も課題となっている。
- 自主的な開催のカラオケ大会等は人気があるものの、有料公演については、集客に難があるので、老人会等の連携により、一部老人会負担で入場料を安価にしてチケットを斡旋している。
- 鑑賞型事業では、平日昼間に開催するなど工夫している。また、チケットに関しても70歳以上割引・障がい者手帳所持の方への割引制度を実施している。

◎参加型事業における課題(ワークショップ、アウトリーチなど)

ワークショップやアウトリーチなどの参加型事業では、文化施設から遠方の地域や交通の利便性が良くない地域に居住する高齢者のためにアウトリーチを積極的に行っている施設もある。一方、特定の地域に集中させず公平性を担保したいという意見もある。

- 当館ではこれまで学校へ出向いてのアウトリーチを多く実施しているが、高齢者施設へのアウトリーチを実施した経験がなく、いずれは実施したいと考えているものの、高齢者施設とのパイプがなく、きっかけを見つけれられていない。
- 土地柄、古くから居住している高齢者が多い。また当施設が駅中心部にあるため、中心部を離れた地域に居住している高齢者が施設まで足を運ぶには交通機関の利便性が悪い場所も有る。そういった地域にアウトリーチ(鑑賞、体験等)を積極的に展開している。
- 主にアウトリーチ事業で、高齢者福祉施設などを訪問させていただき、落語やクラシック音楽など、様々なジャンルの鑑賞型事業を行っているが、時間帯や施設の場所に制限があり、一日でたくさんの方々に見ていただけない。
- 施設に集うアクティブシニア層が持つノウハウが、子供向けのワークショップや地域での活動に極めて有効に働くので、もう少し広めたいと考えている。
- 高齢者の為の卓球や、筋トレ・脳トレ教室やウォーキングプールでの運動など、館全体で挙げれば多種多様な高齢者向け催事を開催している。
- (合唱の公演での)出演時間については、長時間は体力的に厳しい面がある。
- 現在、劇場予算で高齢者(主に認知症のある方)を対象としたワークショップを高齢者施設で実施している。ワークショップ実施時の現場は、スタッフも含めて和やかな雰囲気になりコミュニティも活性化するため、事業の意義を感じるが、活動を広げていくための方法をどうするか課題を感じている。
- 平成27年度まで「高齢者演劇講座」を実施していたが、参加者の確保が極めて困難となったため今年度からは実施を見送っている。高齢者のみならず、各種講演の来場者アンケートでも「観劇はしたいが自分は参加したくない」という意見がほとんどを占めている現状である。
- 高齢者を対象とした事業の組み立てについて、単に高齢者が参加することが目的ではないので、劇場のミッションを理解しアーティストとも目的を共有し企画して実施していく必要があるが、そのようなコーディネートが可能な人材を育成していく仕組みが必要と感じている。
- 市の面積が広大なので、高齢者の来館を促すための鑑賞公演を実施するだけでは、当館の役割を果たしているとは言えない。中山間地の少子高齢化問題に対する、芸術を介したアプローチを目指したいところだが、時間的問題、距離的問題、継続性の担保、また特定の地域に集中させず公平性を担保したいといったハードルがあり、これといった施策を投げられないでいる。とりあえずどこかモデルケースを一つ構築して、そのノウハウを、時間をかけて他地区に波及させたいと考えている。

◎ 文化団体の高齢化と後継者不足等

文化団体の高齢化と後継者不足が深刻化しているという意見がある。さらに伝統芸能の存続への危機感を持つ意見がある。

- 伝統芸能を孫の世代に伝えてほしいと思い、保護者割を設定している「邦楽のスメ！」事業の参加率が少ない。
- 文化団体の高齢化と後継者不足が深刻化している。世代間交流事業や後継者育成、文化活動のサポート事業等必要性を実感している。
- 主な観客が高齢者に偏らざるを得ない伝統芸能においては、観客数が減少傾向にある事は否めない。若い層にも興味を持ってもらうため努力はしているのだが、なかなか結果に結びつかない。このままでは伝統芸能全体の存続への危機感は否めない。

② 高齢者を対象とした事業の具体的事例

◎ 全体的な事業の傾向(企画の形式や特徴、回数、入場者・参加者数、事業費など)

平成 28 年度の自主事業のうち、高齢者を対象とした事業について、特徴的な事業の具体的事例を3件まで紹介していただいたところ、196 件の記入があった。多岐に渡るジャンルの事業が行われており、企画の形式や特徴も多様となっている。

- 全体的な傾向としては、単発に終わる事業だけでなく、年間に複数回、毎月、毎週といった継続的なシリーズ企画になっているものも多い。1回の事業も「毎年恒例」といった、同時期に例年行事として行うものも見受けられ、リピーターとして高齢者の来場を期待する傾向がある。
- 入場者数(参加者数)の規模を見ても、ワークショップや講座形式で十数人程度の事業もあれば、出演と鑑賞が入れ替わるような成果発表形式の事業では数千人規模の事業も見られる。また、シリーズ企画のように、1回ごとの入場者(参加者)の数は少ないものの、回を重ねることで延べ人数が多い事業もある。
- 事業費の規模も大きく異なっている。歌舞伎の巡回公演のように大きな予算規模の鑑賞型事業もあるが、全体を通して見た場合、数百万円の事業にしても、複数の公演回数で企画されているために、1回あたりのコストは数十万円の企画も数多くある。ほとんどコストをかけずに工夫を凝らした活動も見られる。

◎ 高齢者を意識した鑑賞事業、施設利用をサポートするサービス

高齢者を対象とした事業では、鑑賞型の公演の事例が数多く挙げられている。音楽や古典芸能では、高齢者のニーズに応える演目や出演者の選定に配慮している。また、低い価格設定、高齢者が足を運びやすい時間帯の開催などリピーターの獲得を目指した工夫が見られる。

- 高齢者を意識した音楽分野の鑑賞事業は、クラシック音楽のワンコインコンサート、ランチタイムコンサート、ロビーコンサートといった特徴の企画が多い。また、クラシック音楽やポピュラー音楽に共通して、音楽鑑賞だけでなく、出演者と一緒に歌唱するプログラムも見られる。
- 古典芸能では、落語の企画が数多く、毎年恒例や年に複数回の定例寄席や、著名な噺家を迎えた独演会の形式もある。能・狂言では普及を目的とした講座、解説を伴う公演などが行われている。歌舞伎では、松竹大歌舞伎の巡回公演を行っている施設が多い。
- 映画では、文化庁と東京国立近代美術館フィルムセンターが所蔵フィルムを上映させる「優秀映画鑑賞推進事業」の実施や、民間の映画館が少ない地域では一定頻度で例会形式となっている定期上映会を行っている。高齢者が足を運びやすい時間設定として、昼間だけでなく午前中の上映を行う施設もある。
- その他、高齢者をテーマとして扱った演劇やミュージカル作品の上演を行う施設や、民謡、神楽、和太鼓など、高齢者の興味や関心だけでなく、地域文化の継承にも焦点をあてた企画もある。

- 年間を通じた高齢者を対象とした音楽鑑賞プログラムの実施や、高齢者に聴き馴染のあるプログラムの工夫といった事例が挙げられている。事業のアンケートで要望が最も多い落語会を開催する施設や、展覧会をテーマにしたセミナーやパネル展示など、高齢者のニーズを汲み取り、広げていく努力が見られる。
- 車イス席の増設や案内の強化といった施設運営面のサポート、高齢者に対する施設利用料の減額や各種料金の高齢者割引の設定などを講じている施設もある。

◎ 高齢者向けの参加型事業、アウトリーチや福祉と連携した事業

参加型の事業には、例えば音楽では出演者と一緒に歌唱して楽しむプログラム(歌声喫茶)や、演劇やダンスではコミュニケーションや健康維持を促すワークショップや講座などが見られる。また、高齢者施設へのワークショップに取り組むだけでなく、演劇を通じた高齢者福祉のあり方などを学ぶセミナーや人材育成に取り組む事例もある。

- クラシック音楽やポピュラー音楽の事業では、出演者と一緒に歌唱する形式の企画が多い。ポピュラー音楽では、1950年代から60年代にかけて流行した「歌声喫茶」を模したプログラムも見られる。
- 演劇では、オリジナルの脚本で稽古を積み重ねた創造参加型の事業から、気軽にワークショップに参加して成果発表を迎える企画まで、参加の形態が幅広い。ダンスでは、コミュニケーションゲームや体を動かすこと、ほぐすことといった健康の維持につながる内容のワークショップが挙げられる。
- 従来から高齢者が参加している地域の文化団体の成果発表の場も、地域文化活動の活性化や次世代への文化の継承といった主旨を兼ねている面が見られる。
- 健康維持を主眼に置いた事業も多く、高齢者向けのストレッチやヨガの講座を実施する事例もある。そうした講座と合わせて、介護予防の啓発や健康相談などを行うことで、地域住民の健康管理に配慮する施設もある。
- 高齢者へのアウトリーチでは、クラシック音楽での取り組み事例が数多くある。高齢者施設での小規模なコンサートに、地域の演奏家だけでなく、国際的に著名な演奏家が出演する場合もある。また、こうしたアウトリーチを継続的に行うために登録アーティスト制を導入している施設もある。
- 演劇では、高齢者施設でワークショップを行う事例だけでなく、演劇を通じた高齢者福祉のあり方や介護サービスの方法を学ぶためのセミナー、ファシリテーターやコーディネーターの育成などに取り組む事例も見られる。

(4) アンケート調査票

高齢社会における公立文化施設の取り組みに関するアンケート調査

このアンケート調査は、高齢社会に対応した公立文化施設の事業や運営の実態、問題点や課題を把握するため、公立文化施設における取り組み状況や実践例を調査、把握するために実施するものです。お忙しいところ誠に恐縮ですが、本調査の趣旨をご理解いただき、アンケート調査にご協力くださいますようお願いいたします。

お問い合わせ先：株式会社ニッセイ基礎研究所 社会研究部 芸術文化プロジェクト室
(問合せ先・返送先の住所、電話番号、FAX 番号は省略)

I 貴施設での高齢者を対象とした事業*に関する取組状況についてお尋ねいたします。

※ 以下の設問や選択肢での「高齢者を対象とした事業」とは、入場者、参加者等の様々な立場で高齢者をとくに配慮した企画内容の事業(鑑賞事業、参加型事業、アウトリーチ、高齢者福祉と連携した事業、施設利用をサポートするサービス)を指します。なお、高齢者以外の世代を対象に含む場合でも、高齢者を意識している場合は「高齢者を対象とした事業」に含めてお考えください。

Q1 貴施設では、平成28年度の自主事業(主催事業、共催・提携事業を含む)で、高齢者を意識した鑑賞事業を実施していますか(高齢者のみを対象としたものでなくても、高齢者の観客を意識した企画を含む)。

1 はい 129(74.6%) (→SQ1以下順にお答えください) 2 いいえ 44(25.4%) (→Q2以下順にお答えください)

SQ1 Q1で「はい」とお答えの方は、実施している事業を次の中からお選びください。(☑はいくつでも)

- | | |
|--|---|
| 1 <input type="checkbox"/> クラシック音楽・オペラ 48(37.2%) | 2 <input type="checkbox"/> ポピュラー音楽 30(23.3%) |
| 3 <input type="checkbox"/> 日本の伝統音楽 23(17.8%) | 4 <input type="checkbox"/> その他音楽 17(13.2%) |
| 5 <input type="checkbox"/> 演劇・ミュージカル 29(22.5%) | 6 <input type="checkbox"/> ダンス・舞踊 12(9.3%) |
| 7 <input type="checkbox"/> 古典芸能 63(48.8%) | 8 <input type="checkbox"/> 映画 24(18.6%) |
| 9 <input type="checkbox"/> 芸術文化関連の講座・講演会 30(23.3%) | 10 <input type="checkbox"/> ワンコインコンサート 21(16.3%) |
| 11 <input type="checkbox"/> 無料ロビーコンサート 17(13.2%) | 12 <input type="checkbox"/> その他(具体的に_____) 23(17.8%) |

Q2 高齢者向けの参加型事業を実施していますか(高齢者のみを対象としたものでなくても、高齢者の参加を促す工夫があるものを含む)。

1 はい 69(39.9%) (→SQ2以下順にお答えください) 2 いいえ 104(60.1%) (→Q3以下順にお答えください)

SQ2 Q2で「はい」とお答えの方は、実施している事業を次の中からお選びください。(☑はいくつでも)

- 高齢者合唱団 21(30.4%)
- 高齢者劇団 1(1.4%)
- 高齢者向けの実演教室(合唱、器楽、演劇、ダンス等) 22(31.9%)
- 高齢者向けの講座・教室(生け花、お茶、芸術教養講座等) 27(39.1%)
- その他(具体的に_____) 25(36.2%)

Q3 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業を実施していますか。

1 はい 58(33.5%) (→SQ3以下順にお答えください) 2 いいえ 115(66.5%) (→Q4以下順にお答えください)

SQ3 Q3で「はい」とお答えの方は、実施している事業を次の中からお選びください。(☑はいくつでも)

- 鑑賞型アウトリーチ(高齢者施設における出前コンサートなど) 47(81.0%)
- 参加型アウトリーチ(高齢者施設におけるワークショップなど) 9(15.5%)
- 認知症患者向けのプログラム 3(5.2%)
- 音楽療法、ドラマセラピー、ダンスセラピー 1(1.7%)
- その他(具体的に_____) 7(12.1%)

Q4 次（SQ4参照）のような高齢者の施設利用をサポートするサービスを実施していますか。

- 1 はい 128 (74.0%) (→SQ4以下順にお答えください) 2 いいえ 45 (26.0%) (→Q5以下順にお答えください)

SQ4 Q4で「はい」とお答えの方は、実施している事業を次の中からお選びください。(☑はいくつでも)

- 1 バリアフリーやユニバーサルデザインの推進 62 (48.4%)
2 高齢者割引 35 (27.3%)
3 高齢者向け先行予約 4 (3.1%)
4 高齢者の鑑賞しやすい時間帯の公演 76 (59.4%)
5 読みやすいプログラム(文字サイズの拡大) 12 (9.4%)
6 高齢者の客席案内などの積極的な手助けや協力 72(56.3%)
7 高齢者の手助けや協力などを行えるための職員研修 27 (21.1%)
8 その他(具体的に_____) 4 (3.1%)

Q5 貴施設における高齢者を対象とした事業の目的について、以下の選択肢からあてはまるものをお選びください。(☑はいくつでも)

- 1 高齢者に文化・芸術の鑑賞や創造の機会を提供するため(文化・芸術の振興) 135 (78.0%)
2 高齢者の生活に変化を与え、余暇生活を充実させるため(余暇活動の充実) 96 (55.5%)
3 高齢者の学習活動や社会参画の機会を提供するため(生涯学習の充実) 70(40.5%)
4 高齢者の社会参加を促進し、社会的孤立を防ぐため(社会的孤立の防止) 50 (28.9%)
5 高齢者の健康増進、身体機能の維持や介護予防のため(健康増進、介護予防) 27 (15.6%)
6 その他(具体的に_____) 4 (2.3%)

Q6 Q5の1～6の選択肢のうち、事業の目的として貴施設が最も重点を置いている項目の番号をひとつだけお選びください。

-
- 1 文化・芸術の振興 106 (61.3%) 2 余暇活動の充実 18(10.4%) 3 生涯学習の充実 17 (9.8%)
4 社会的孤立の防止 7 (4.0%) 5 健康増進、介護予防 4 (2.3%) 6 その他 1 (0.6%)
無回答 20 (11.6%)

Q7 貴施設が高齢者を対象とした事業に取り組む際に、地域で連携するパートナーはいますか。以下の選択肢からあてはまるものをお選びください。(☑はいくつでも)

- 1 自治体の福祉行政分野 61 (35.3%) 2 高齢者介護施設 54 (31.2%)
3 NPO 法人・ボランティア団体 35 (20.2%) 4 大学・専門学校 12 (6.9%)
5 地域のアーティストや文化活動団体 66 (38.2%) 6 県域内・県域外の文化施設 9 (5.2%)
7 その他(具体的に_____) 13 (7.5%)

Q8 高齢者を対象とした事業に対して感じている課題や問題点がありましたら、300字以内でお書きください。

II ご回答いただいた方の連絡先をお尋ねいたします。

Q9 回答者の氏名のため省略

Ⅲ 高齢者を対象とした事業の具体的事例

○10 貴施設での平成28年度の自主事業のうち高齢者を対象とした事業について、特徴的な事業の具体的事例がありましたら、3件までご紹介ください。なお、SQ1で「ワンコインコンサート」を実施していると回答された場合も、詳細をご記入ください。

事例 1

事業分類 (☑はひとつだけ)	1 <input type="checkbox"/> 高齢者を意識した鑑賞事業を実施		2 <input type="checkbox"/> 高齢者の鑑賞や施設利用をサポートするサービス		
	3 <input type="checkbox"/> 高齢者向けの参加型事業を実施		4 <input type="checkbox"/> 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業		
5 <input type="checkbox"/> その他(具体的に_____)					
事業名					
出演者			公演回数	回	
実施日	平成 年 月 日～ 月 日	入場者数 (見込み)	人	事業費 (見込み)	万円
事業の 目的・内容 (100字以内)					

事例 2

事業分類 (☑はひとつだけ)	1 <input type="checkbox"/> 高齢者を意識した鑑賞事業を実施		2 <input type="checkbox"/> 高齢者の鑑賞や施設利用をサポートするサービス		
	3 <input type="checkbox"/> 高齢者向けの参加型事業を実施		4 <input type="checkbox"/> 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業		
5 <input type="checkbox"/> その他(具体的に_____)					
事業名					
出演者			公演回数	回	
実施日	平成 年 月 日～ 月 日	入場者数 (見込み)	人	事業費 (見込み)	万円
事業の 目的・内容 (100字以内)					

事例 3

事業分類 (☑はひとつだけ)	1 <input type="checkbox"/> 高齢者を意識した鑑賞事業を実施		2 <input type="checkbox"/> 高齢者の鑑賞や施設利用をサポートするサービス		
	3 <input type="checkbox"/> 高齢者向けの参加型事業を実施		4 <input type="checkbox"/> 高齢者施設へのアウトリーチや高齢者福祉と連携した事業		
5 <input type="checkbox"/> その他(具体的に_____)					
事業名					
出演者			公演回数	回	
実施日	平成 年 月 日～ 月 日	入場者数 (見込み)	人	事業費 (見込み)	万円
事業の 目的・内容 (100字以内)					

2. 現地調査

(1) 現地調査の実施概要

アンケート調査の回答施設のうち、「高齢者を対象とした事業に対して感じている課題や問題点」、「高齢者を対象とした事業の具体的事例」への自由記述による回答の内容から、本調査に参考となる回答のあった14施設を候補として抽出した。さらに、なるべく異なる地域特性、施設規模、活動内容の事例を調査することとして、最終的に以下の5施設に決定した。

[調査対象一覧]

施設名	調査実施時期	所在地
第一生命ホール	2016年12月7日	東京都中央区
パロー文化ホール(多治見市文化会館)	2016年12月8日	岐阜県多治見市
京都芸術センター	2016年12月8日	京都府京都市
熊本県立劇場	2017年1月18日	熊本県熊本市
静岡県舞台芸術センター SPAC	2017年1月19日	静岡県静岡市

現地調査では、高齢者を対象とした事業や運営の担当者などに次のような内容を質問した。

- 調査施設の概要
- 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容
- 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果
- 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点
- 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

① 第一生命ホール

調査時期:2016年12月7日(木)15:30~17:30

インタビュー対象者:植田寛(事務局長)、田中玲子(エグゼクティブ・プロデューサー)

1. 調査施設の概要

◎ アウトリーチの牽引役として注目を集める音楽専用ホール

2001年、晴海アイランドトリトンスクエアに開館。767席のクラシック音楽専用ホールで、第一生命保険株式会社が所有し、認定NPO法人トリトン・アーツ・ネットワークが主催公演事業を運営している。活動の財源は、第一生命、正会員や特別会員(法人会員)からの寄附、会費やチケット売上などの事業収入、助成金等によって運営されている。日本におけるクラシック音楽のアウトリーチ活動の牽引役として全国的にも知られる。2015年度のコミュニティ事業は43回を実施しており、そのうち近隣の教育施設や病院、福祉施設などへのアウトリーチが32回を占めている。

【インタビューの発言から】

- 第一生命日比谷本社ビルを建て替える際に、旧・第一生命ホールを閉じて、晴海のトリトンスクエアに再び第一生命ホールとして開館し、今年で15年を迎える。住居、職場、商業施設の複合施設の中に、街づくりの一環として音楽専用ホールが設置された。
- NPO法人としてはホールでの主催・共催公演(ホール事業)とアウトリーチ活動(コミュニティ事業)などを行っており、貸館業務は第一生命の子会社がやっている。「音楽でつながり、音楽と共に生きる社会の実現」をNPO法人のビジョンとしており、地域に密着した活動を展開している。
- アウトリーチは、主に中央区の晴海、月島、勝どき、佃方面を中心として中央区全体の小学校、幼稚園と、それからホール隣接地域の江東区の豊洲と有明地区の小学校、幼稚園、保育園に向けて行っている。小学校は原則4年生を対象に音楽室で行っている。



第一生命ホールの内観

2. 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容

◎ 介護施設でのアウトリーチ

日頃コンサートホールには出向けない高齢者に、演奏家による音楽を無償で提供している。演奏家は施設担当者と相談のうえ決定している。2016年度は介護施設3か所でのアウトリーチを実施し、ソプラノとハープ、マリンバ、金管と打楽器といった組み合わせで3回、計280人の観客に演奏を届けた。1回あたり約90人(施設によっては2回に分けることもある)で、広めの食堂スペースで演奏を聴いていただく。

【インタビューの発言から】

- 介護施設は毎年決まった施設に行くことが多い。基本的に中央区は、開発によって15年くらいに人口が倍増して、若い世帯が流入した。相対的に高齢者の割合が低くなり、小さいお子さんがいる世帯が多いところである。
- 他の区に比べると、高齢者の施設は充実していて、福祉サービスが行き届いている感じがする。
- 「おさんぽ応援団」という団体が主催で「お花見散歩と音楽会」という企画も共同で行っている。施設から車いすでお散歩をして、お花見をし、外を歩いて、終わってからその施設に集まって、そこで音楽を聴いていただく。



特別養護老人ホームでのアウトリーチ

◎ 昼の音楽さんぽシリーズ

ホールで平日の昼間に開催する、休憩無しの90分のコンサート。旬な演奏家をMC付きで紹介。低廉な料金設定となっている。2016年度は4回の公演で約1,500人の来場者となっている。夜間に外出しづらい主婦や高齢者を主な対象としている。挑戦的なプログラミングを実現していることが特徴でもある。平日11時に開演、12時30分に終演し、昼食や買い物とあわせて出掛けてもらうイメージ。

【インタビューの発言から】

- シリーズスタート時は「クラシックはじめのいっぽ」というタイトルで入門編という感じを押し出していたが、アンケートを取ったら、月に1回以上コンサートに行く方と答えた方が非常に多かった。そこで、知的好奇心を満たしてくれるような「濃いプログラム」でもいけるのではないかとということで始めた企画で、今年が2年目。
- どこでやっても同じ名曲を並べたものではなく、演奏家が「ここだったらこれができるかな」というものに挑戦していただく場になり、それを観客にも楽しんでいただくという試みをしている最中だ。
- このシリーズの来場者のメインターゲットは高齢者だが、特にメインターゲットにしなくても他のコンサートシリーズにもきちんと来てくださっているという印象がある。



昼の音楽さんぽシリーズ ©越間有紀子

3. 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果

◎ 観客やボランティアなど、高齢者の多面的な関わり方

ホール事業の顧客分析では、高齢者の割合が年々高まっていることが明らかで、サポーター(ボランティア)組織でも高齢者が活発に活動しており、ホールに関わる元気なお年寄りが増えている。サポーターは、ホールのスタッフが日々顔の見える関係で関わっており、サポーターの活動を支援するためのマナー研修も行っている。個々人によって動機や得意なことが異なっているため、適材適所の配置が難しい面があった。そこで、昨年、それぞれの能力・経験・ネットワークを活かして今まで以上に活躍していただくため、サポーター制度をリニューアルした。

【インタビューの発言から】

- 2013年、2014年、2015年のチケット購入者の年代分析で、ネットでのオンライン予約が2013年の時点では40代の率が高かったが、2015年になると60代が一番多い。やはりネットを活用して元気でホールに来られる高齢者の方が増えていることを改めて思った。
- サポーター(ボランティア)は、定年退職をした方と主婦が多く、50代、60代、70代の方も非常に多い。そういった方たちの意欲を日々感じる。サポーターという組織を持っていて、誰でも関わられる開かれた組織であることは、NPOであることの強い意味だと思う。
- 職員でサポーターの調整を担当するのは2、3人。ただ、各イベントの担当と一緒にやることになるので、職員全員が関わっている。日々声を吸い上げて、考えながらやっている。
- 昨年、サポーター組織の活動の目的、役割、要件を整理した。ボランティアに参加する方にとって一番大事なのは、本人のやりがい感であり、認められるということだと思う。



サポーターの活動
(ホールでのマナー研修)

4. 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点

◎ 将来に高齢者となる 30～40 代の興味や関心を高めること

トリトンアーツ開設以来の弦楽四重奏のコンサートシリーズでは、客層の中心が 60～70 代となっており、リピーター率も高い。その一方で、30～40 代の観客が少ない。そのため、中長期で観客が先細りする懸念が年々大きくなっている。現在、ホールに足を運ぶ高齢者は、意欲も高く、インターネットも活用し、クラシック音楽の楽しみ方を知っているが、次に高齢者となる現在の若い世代の方が、あまりホールに足を踏み入れていない。その要因をつかむ必要がある。

【インタビューの発言から】

- 弦楽四重奏のコンサート(クアルテット・ウィークエンド(SQW))の客層は、もはや60代や70代が中心になってくる。知的好奇心の旺盛なヘビーリスナーの高齢者が多い一方で、より若い30代や40代が、こうしたコンサートに足を踏み入れる方が少なくなっているのを危惧している。
- そういう意味では「元気な高齢者は特別なことをしなくてもすでに来ていただいている」という思いはある。もちろんホールに来られない高齢者のところにはもっと行かなくてはいけないが、元気な高齢者の方は今来ている。だけど、その後の世代は本当に来ていないので、何とかしないと、という思いである。

◎ 客席に到達するまでのアクセシビリティ、補聴器の使用者への配慮

東京の都心にあり、公共交通機関のアクセシビリティは良い条件だが、建物の入口からホールの入口まで、さらに、ホールの入口から客席までの動線には段差も多い。車いすの利用者には、段差解消機などを設置しているものの、介添する人が必要となる。また、コンサートの最中に、補聴器のハウリング音が発生しないようにアナウンスをするなど、運営面で配慮していることもある。

【インタビューの発言から】

- ホールエントランスまでの一般のお客さまの動線がエスカレーターであり、車いすの方にはエスカレーターではなくエレベーターを使用していただくため、ホールに電話をして係員がエレベーターで迎えに行くことになっている。
- 車いすの高齢者の方で「自分できちんと普通に来られるホールがいい」とおっしゃった。要するに介助をしてもらわなくても来場できる状況が一番いいと。それが当たり前なのだというお話は聞いたことがある。
- 最近、補聴器を付けている方が、演奏会の途中で補聴器がハウリングしてしまったことがあり、開演前に注意を呼び掛けるアナウンスもしている。

5. 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

◎ 付加価値のあるコンサートと地域に密着したアウトリーチの積極的展開

特に高齢者を意識したコンサートを行っているわけではないが、演目や時間帯の設定の結果、シニア層が客層の中心になっている。また、地域的には富裕層が住むエリアでもあるため、元気で知的好奇心の旺盛な高齢者も多い。そうした高齢者は、他のコンサートホールと競合する顧客でもあるため、付加価値のあるプログラムを提供することが重要。また、地域に密着したホールとして、足を運ぶことができない人々のために、今まで以上にアウトリーチ活動の訪問施設を開拓することが求められる。

【インタビューの発言から】

- 高齢者の中には、無料や低額のコンサートを一覧できるホームページをチェックして、なるべくお金を節約し、工夫してコンサートを楽しむ方がいらっしやるとの話を聞いた。
- 高齢者施設でのアウトリーチに行くと、一生懸命手を伸ばして演奏家に「本当に良かった。ありがとう。ありがとう」と言う方もいれば、ただ黙って涙を流される方もいる。
- 私たちは、決まった施設、声の掛かった施設にしか行けていないが、私たちがアプローチできていない

て、もっと必要とされている施設があるのかもしれない。

◎ 「文化・芸術が、誰のために、どうあるべきなのか」を考える契機

高齢者施設でのアウトリーチは、高齢者のために実施するものであると同時に、アーティストやスタッフにとっても、「音楽(文化・芸術)が、誰のために、どうあるべきなのか」を考える契機となる。それは、ホールでの鑑賞型の公演事業を行うことや、子どもを対象とした学校へのアウトリーチとも異なる気付きを与えてくれるものである。

【インタビューの発言から】

- 高齢者施設でのアウトリーチは、アーティストにも反応が直接跳ね返ってくる。いつもチケットを買って来てくれる観客の前で弾くのは全然違う体験ができるので、「この人たちのために自分の音楽がどうあるべきか」ということをアーティストが考えるきっかけになると思う。
- 高齢者だから、例えば演歌がいいとか、そういうことは全然なくて、クラシック音楽でも、ジャズを聴いても、昔のことを思い出して思い出を語ってくださる高齢者の方もいる。
- 私が60歳、70歳になって、こういう活動が当たり前の活動になっているように、活動を続けていかないと、と思う。

② バロー文化ホール(多治見市文化会館)

調査時期:2016年12月8日(木)10:00~12:00

インタビュー対象者:三宅朝子(バロー文化ホール(多治見市文化会館))

1. 調査施設の概要

◎ 開館 35 年を迎えた郊外の多目的ホール

人口約 11 万人の岐阜県多治見市にあるバロー文化ホール(多治見市文化会館)は、1981 年に開館。平成 18 年より公益財団法人多治見市文化振興事業団(以下、事業団)が指定管理者として管理運営を行っている。2015 年より株式会社バローが命名権を取得して「バロー文化ホール」の名称となる。事業団は文化ホール以外にも市内公民館、図書館、自然体験施設、体育館、駐車場、学童保育所、資料館など多様な施設の指定管理者である。多治見市は陶磁器の国内生産量の約 5 割を誇る美濃焼の産地として古くから歴史がある地域である。近年、名古屋市など都市圏に近く、アクセスも便利のため、新しく若い世帯が流入している。

【インタビューの発言から】

- バロー文化ホールは今年で35年になる。1,314人収容の大ホールと402人収容の小ホール、展示室、会議室、練習室、和室等が設置されている。
- 竣工以来35年が経過し老朽化が進行していることをふまえ、今年の4月より半年間かけて初めて大規模な改修工事を行った。その間大小ホールを全く使えない状態だったが、ホールが使えない時だからこそできることはないか、これまでの固定概念から離れて新たにできることを模索した。
- 市は、今後20年、30年というスパンで中心市街地にコンパクトシティ化を進めており、市街地の中に大きなマンションを建てると早々と入居者が埋まる。独居老人世帯も急速に増えている。
- 古くから住んでいる方と、新たに多治見に来る転入者との2つが共存しているが、各世代が分断されている部分もある。



バロー文化ホールの外観

2. 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容

◎ レコードクラブ

2016年4月より実施。家庭に眠るレコードを持ち寄り、コーヒーを片手にレコードにまつわる思い出を語るレコード鑑賞会。2016年度は12回開催した。毎月第3木曜日の14時から15時、小ホール前のロビー空間にプレイヤーを設置。参加者数は各回20~30人程度。常連の参加者と、新規の参加者が半々程度いる。

【インタビューの発言から】

- 職員同士のふとした会話の中で、「レコード鑑賞会」の話題が出たのが企画のきっかけとなった。
- すでに市内各地区の公民館が地域住民を対象にサロン事業を開催している。全市域対応施設のバロー文化ホールが行うからこそできるサロン事業とは何かを考えた。そこで「お互いに名前は知らなくても顔は知っている」くらいの緩いつながりの中で、出入り自由の場所・人間関係をつくりたいと思いレコードクラブを始めた。



レコードクラブ

- 毎回10人ぐらいの方が様々なジャンルのレコードを持ってきている。レコードをかける前にひとりずつ順番の前に出てきてもらい、曲紹介、その曲と出会ったきっかけ、どんなところが好きか等話してもらう。聴くだけの方もいたり、他参加者が持ってきたレコードを借りて情報交換をしながらレコードをかける人もいる。
- 想像以上にレコードクラブは評判がよく、私たちも驚いた。レコードクラブはみんなが持ってきた曲を聞くため、思ってもみない曲がかかることもある。思いがけない音楽との出会いも楽しみのひとつだ。

◎ ふらっとコンサートシリーズ

公共ホールを身近に感じてもらい、来館への敷居を低くするためのコンサート。会場はホールのロビーで、事前申し込み不要、入場無料となっている。学校向けアウトリーチ公演をお願いしているアーティストなどに依頼し、1時間以内の短い時間で手軽に楽しめるコンサートを行っている。2016年度は8回実施し、全体を通じた入場者数は約1,000人。未就学児の入場も可能、入退場を自由に行っているため、子育て中の方も楽しめる企画となっている。改修工事の期間にチャレンジした企画が好評を博し、翌年度も継続することになった。

【インタビューの発言から】

- ホールが改修工事で使えない間、ホール以外の場所で事業を行うことを考え、ロビーを活用することにした。名前のおお「ふらっと」やってきて楽しめ、「フラット」なロビーで楽しめる。
- ジャンルはクラシック・ジャズ・邦楽など毎回バラエティに富み、日時も平日・休日、昼・夜を問わず開催し、毎回100人前後、多い時には200人を超える人々が、文字通り「ふらっと」気軽に来場した。
- 時間設定を平日の昼にすると、アクティブシニア層が多い。文化ホール近隣住民の皆さんにもコンサートの案内を出し、参加して頂いている。またこのコンサートは年齢制限をしていないため、子育て世代からも気軽に楽しめるコンサートと好評の声を頂いている。



ふらっとコンサートシリーズ

◎ ちゃわんだふる音楽宅配便

生の音楽に触れる機会の少ない地域住民に対し、一流の演奏家が本格的な音楽を届けるプログラムで、高齢者介護施設への音楽アウトリーチを行っている。施設入居者は自力で生の舞台芸術に触れる機会がないため、演奏者を連れて特別養護老人ホームなどを訪問し、出前コンサートを実施している。2016年度は高齢者介護施設へのアウトリーチは1回実施した。来年度以降も継続していく予定である。

【インタビューの発言から】

- 多業種の指定管理を受託する事業団の強みとして、職員ひとりひとりが多方面に人とのつながりを持っていることだ。今回の高齢者介護施設での実現も、すでにある施設相互の職員同士のつながりの中で、大変迅速に話が進んでいき実現した。アウトリーチを行う上で、会場となる施設の協力は欠かせないものだと思う。



ちゃわんだふる音楽宅配便

3. 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果

◎ 一人ひとりとの「顔の見える関係」づくり

「レコードクラブ」も「ふらっとコンサート」も比較的小規模な人数を対象に行っている事業であるため、高齢者に限らず、個々の観客と顔が見える関係をつくり、ニーズをつかむことができる。こうした関わり方は、大ホールでの鑑賞公演だけでは生まれにくいものでもある。

【インタビューの発言から】

- 文化ホールという施設自体、鑑賞型の大型公演事業では来場者を一律に捉えてしまいがちだ。「ふらっとコンサート」や「レコードクラブ」は小規模な事業のため一人一人の顔が見える。その人が求めていることは何か。私たちが事業を通じて目指したいことは等互いに話せるようになってきた。
- 直接、高齢者施設の職員と話すことで、気を付けること、困っていること等情報交換ができる。現地に行かなければ分からないことがある。顔が見える職員同士のコミュニケーションが好循環となり次につながっていく。

4. 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点

◎ バリアフリーにおけるハード面の課題

1981年の開館当時とは、バリアフリーを求める水準が社会全体として大きく変化しており、高齢者や車椅子の利用者には不便を感じる人が少なくない。駐車場の不足、エレベーターやスロープの未整備、つまずきやすい床面といったハード面での課題が多い。他にも、高齢者特有の課題として、自由席公演の場合の開場前の行列や、待ち時間でくつろぐスペースが不足すること、広報誌等の印刷物の文字サイズが小さいことなどが挙げられる。

【インタビューの発言から】

- 施設がバリアフリーではないということと、駐車場が不足することだ。高齢者の方は1人1台の車で来るため、駐車場がいっぱいになってしまう。駅から歩いて12～13分なのだが、それは遠い。
- エレベーターがないため、2階席には階段を上らなければならない。また、1階席もスロープを渡って行けるところが一部しかない。
- 1階の廊下の床がタイルだが、平坦ではなく、やや凹凸があるため、台車運搬等不便を感じることもある。35年前の開館当時はモダンな建物として評価が高い設備だったのだが、現在となっては、全体的にバリアを感じる部分が少なくない。

5. 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

◎ 関係をつくり、声を聞くことから始まる社会包摂

今後も高齢者の割合が増加していくが、自分自身が高齢者になる前は、高齢者にとって何が不便と感じるのか分からないことが多い。漠然とした高齢者のイメージではなく、一人ひとりの顔の見える関係から、声を聞いていくことが必要である。その関係をつくっていくことが、地域と公立文化施設との関わり方を変えていくことにもつながる。近年、公立文化施設に社会包摂が求められるようになっているが、むしろ、なぜ今まで社会包摂という考え方が当たり前ではなかったのか、改めて考えた上で、これからの公立文化施設の役割や文化・芸術と高齢者との関わり方を変えていくことが重要である。

【インタビューの発言から】

- 高齢者の方は、これからどんどん増えていく。私たちにとって何ということはないことが、高齢者には大変だったり、その逆のこともある。そういう意見を大事にしたい。
- (インタビューの三宅氏自身が以前は図書館に勤務していた経験から) 図書館は、地域の課題解決のためにあり、すべての人がすべての資料を手にとれるようにするという根本的な考え方がある。文化ホール勤務となり「社会包摂」という言葉が頻繁に使われているキーワードの一つと知り、文化ホール

は今までそうではなかったのかということが、不思議だった。

- 文化芸術は非常に幅広く、いい公演を呼んでみんなに見てもらいたいとは思いますが、地域の皆さんが何をしたいか、聴きたいかということも積極的に取り入れていきたいと思っている。

③ 京都芸術センター

調査時期:2016年12月8日(木)15:30~17:30

インタビュー対象者:山本麻友美(チーフプログラムディレクター)、勝冶真美(プログラムディレクター)

1. 調査施設の概要

◎ 明治2年に開校した歴史的な校舎をアートセンターに改築

1869(明治2)年に開校した歴史ある元・明倫小学校をアートセンターに改築した京都芸術センターは、2000年に開館した。展覧会や舞台公演など多様な芸術の鑑賞の場を提供すると同時に、アーティストの創作・発表活動を支援している。公益財団法人京都市芸術文化協会が指定管理者として管理運営を行っている。

【インタビューの発言から】

- 京都芸術センターのオープンは2000年4月で、16年目を迎えている。本来的には若い芸術家の活動を支援することを一番のミッションにしている。
- もともと京都に芸術系の大学がたくさんあり、大学を卒業した後も活動を続けたいというアーティストにどのようなことができるだろうか、ということを考えて活動している。作品を制作するスペースの提供やクリエーションを主にやっている。



京都芸術センターの外観

◎ 地域住民の誇りや愛着と、センターに求める役割や期待

1993年に閉校した明倫小学校は、文化への関心や教育への熱意の強い明倫学区の人々によって支えられてきた。京都芸術センターに生まれ変わるまでの計画策定やパイロット事業の実施にも時間をかけ、改修も、小学校として使われていた当時の姿を残して実施された。明倫小に対する地域住民の誇りや愛着が強いため、京都芸術センターに求める役割や期待にも、特別な思いが窺える。

【インタビューの発言から】

- 京都芸術センターの一番の特徴でもあるが、建物自体が地域の方の寄付で建っているのだから、地元との関係がかなり密接だ。アートセンターとなってから、地域に馴染むまでにかかなりの時間がかかった。ここ何年かで、ようやく私たちがしていることがどういうことなのか、互いに歩み寄りの中でご理解いただけたのかなという感じだ。
- この地域は祇園祭の真ん中で、コミュニティのつながりがかなり強く、皆さん、自分たちが京都の町をつくってきたというプライド、自負がある。この建物も先祖や親がお金を出して造ったものであり、大事に使ってきたのだから、という思いを感じる。

2. 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容

◎ 明倫レコード倶楽部

レコード研究家の亀村正章氏と、作家のいしいしんじ氏を進行役に迎えて、二人の貴重なレコード・コレクションの中から、テーマに沿った名曲をお届けする「明倫レコード倶楽部」。クラシック、映画音楽、ジャズ、ポップスからロックまで、ジャンルや地域、時代を横断しながら、ナビゲーターの持ち味による選曲と解説で楽しむ企画となっている。参加者は50代から70代の男性の割合が高い。料金は500円で、要事前申込・先着順となっている。2016年度では年間4回で、入場者数は各回100人程度。

【インタビューの発言から】

- 「明倫レコード倶楽部」は、高齢者だけを対象として意識しているわけではないが、集まっている人たちは高齢者が多く、これを大変楽しみにしている人が非常に多い。
- レコードを聴くこと自体が、ノスタルジーを喚起するものがあるのだろう。家でレコードを聴く環境がなくなってきていると、ここに来て聴くという機会になったのかなと思う。
- 例えばクラシック音楽の同じ曲を、指揮者を変えて聴き比べるといったプログラムなど、講師が選曲し、解説をする。講師のファンもいる。
- レコード自体もたくさん寄贈もいただいている。これを始めてから、「うちのレコードをもらってください」というお問い合わせが殺到し、今はお断りしている。
- レコードプレーヤーがあればできることなので、出張して他の場所でもできれば、と思っている。



明倫レコード倶楽部

◎ 素謡の会

京都を中心に活動する能楽師による、能のさまざまな曲を素謡で上演するプログラム。能という芸能の軸である「謡(うたい。能の詞章(台詞や歌謡))」を通して詞章の持つ魅力、響きの美しさに迫る企画。素謡(すうたい)は、能一曲を所作や囃子を伴わず、座した状態で謡のみで表現する上演形式のこと。解説や仕舞、アフタートークなども交えながら、謡の魅力をわかりやすく伝えることを目的としている。年間のテーマを定め、1回に1曲ずつ実演し、2016年度では4回実施。入場者数は各回 100人程度。

【インタビューの発言から】

- 「素謡の会」は、毎年テーマを決めてナビゲーターの田茂井廣道先生(観世流能楽師シテ方)と一緒にプログラムを考えている。詞章が配られて、それに目を通しながらプロの能楽師が謡うのを聴いている。
- 78畳の畳敷きの大広間で、素謡のみを集中して聴く。実際に素謡の稽古をしている、していたという方もいらっしゃる。
- 還暦を過ぎた能楽師が出演した舞台上で、帰り際に、客席にいたおばあさんに、「あんた、うまなったね。私、初舞台から見てるえ」と言われたと。京都はそういう怖い客がいるから気を付けないといけない、と言われたことがある。



素謡の会

◎ ボランティアスタッフ

事業をサポートするボランティアスタッフを組織しており、展示の監視のほか、公演やワークショップの受付などを行う。メンバー数は約 300人。コーディネーターを担当するスタッフが1人おり、連絡や調整でファックスや郵送などの手間がかかるため、なるべく手助けしながらウェブやメールに切り替えるように努めている。ボランティアスタッフは、茶道の稽古や英会話サークル、花見や紅葉狩りなど自主的な集まりも企画する。京都芸術センターにとってのよき理解者であり、重要なご意見番でもある。

【インタビューの発言から】

- ボランティアスタッフは開館当初から活動しているので、ベテランの方も多い。年齢層的には若い人もいますが、活動の頻度から見ると、やはり高齢の方が活発。ベテランの方は、私たちよりも芸術センターの活動をよく知っている感じだ。
- 目も肥えているし、耳も肥えているので、いいモニターというか、ご意見番である。どのお客さんよりも厳しい。



ボランティアスタッフ

- ボランティアスタッフ同士、仲のいい人で集まって、自主的な活動をしたりしている。毎年、年末も大掃除をしてくださるし、お茶会もあるし、古典芸能の勉強会や、英語、映画のサークルがあり、すごく楽しそう。

3. 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果

◎ センターへの理解・支持と、地域に対する誇りの醸成との双方向の関係

「明倫レコード倶楽部」や「素謡の会」に来てくださる地域の高齢者は、事業内容の良さや、京都芸術センターが好きで来ている。地域の高齢者は京都芸術センターの重要なリピーターであり、理解者、支持者となっている。京都芸術センターが地域外から評価され、外国の人がたくさん来たりしていることが、地域の誇りにもつながっている。

【インタビューの発言から】

- 「明倫レコード倶楽部」や「素謡の会」にずっと来てくださっているような人たちが、京都芸術センターのベースの観客になってくれている。
- 彼らは事業の内容もあるが、おそらく京都芸術センターのことが好きで来てくださっていると思う。「高齢者向けの事業です」と銘打ったら、来なくなると思う。若者向けのものを行っている場所だからこそ来るという、逆説的な印象もある。
- 京都芸術センターが行っている事業が、お年寄りに限らず地域の刺激になっていると思う。

◎ 世代や経験に関わらず人材を育成すること

京都芸術センターで制作を行う若いアーティストや招聘した外国人アーティストに刺激や影響を受けて、自ら作品の創作や実演を始める高齢者もいる。他のアーティストの表現を見て、研究し、自分の表現を生み出したり広げたりすることは、20代や30代といった若いアーティストでなく、アートを実践した経験のない高齢者であっても、人材育成として位置付けることができる。

【インタビューの発言から】

- ボランティアでギャラリーの監視によく入ってくださっている女性が、自治会のパッチワークサークルにいる。ギャラリーで展示されていたアーティストの作品からインスパイアされた自分なりのパッチワークで作っていて、すごいと思った。
- コミュニティダンスの企画に参加した地元の男性やボランティアのおじさんで、ダンサーになった人が複数いる。中には73歳でコンテンポラリーダンスを始めた人もいて、自分たちで振付したダンスを創作し、踊っている。

4. 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点

◎ 高齢者の嗜好やニーズに対する先入観

「高齢者を対象とした事業や運営」を考える際に、高齢者の嗜好やニーズに対する先入観が、必ずしも正しいとは限らない。「多様な芸術に関する活動を支援し、芸術に関する情報を広く発信するとともに、芸術を通じた市民と芸術家等の交流を図る」という京都芸術センターの目的に照らして、地域の高齢者を含めた市民に何が必要かを考えながら、事業を組み立てている。

【インタビューの発言から】

- 高齢者に何が必要かを考えると、「居場所をつくる」、「人と交わる場所をつくる」、あるいは「生きるモチベーションを上げる」といったことが考えられる。京都芸術センターでは、何かクリエイティビティを刺激するような事業をしたいと考えている。

◎ 施設面での高齢者のハードル(段差、畳)

開館初期の頃に比べて、高齢者の来場割合も全体的に増えており、実人数も増えている。その結果、初期の頃にはなかった施設内での段差での転倒や、雨天時の屋外の石畳で滑って転倒するといった事故が発生するようになった。また、「素謡の会」では畳敷きの会場を使っているものの、座布団ではなく椅子の要望が高まり、和室空間の中での表現を体験するスタイルが変化している。

【インタビューの発言から】

- もともと段差が多い建物で、屋外の石畳も滑りやすいので、転倒される方がいる。初期の頃はなかったが、ここ何年か、転倒されて救急車を呼んだことがあった。
- 高齢者が多い「素謡の会」にしても、畳敷きの大広間を会場としているが、高齢者になればなるほど畳に座りにくいため、畳の上にパンチカーペットを敷いて椅子を並べている。最初の頃は半分以上座布団だったが、どんどん減って、今では座布団が要らないようになっている。

5. 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

◎ 高齢者と公立文化施設の「必要とし、必要とされる」ような双方向の関係性

京都芸術センターでは、展覧会や公演の来場者、ワークショップの参加者、あるいはボランティアなど、様々な立場で地域の高齢者が関わっている。継続的に関わってくれる高齢者の、京都芸術センターに対する理解や支援の気持ちをスタッフは感じている。また、そうした気持ちを持つ高齢者にとっては、京都芸術センターから必要とされる存在であることが、生きる元気の源となっていると考えられる。文化施設と高齢者が、お互いに必要とする双方向の関係を大切にしていくことが重要である。

【インタビューの発言から】

- 京都芸術センターに関わってくれる高齢者の方は、みんなきっと楽しいのだと思う。ここに来てくれるということは、やはり芸術が好きで、若い人を応援してあげたいという気持ちがあると思うので、それをうまくつないでいくことができたらと思っている。
- 高齢のボランティアの方には、ここで必要とされる存在であることを実感するために、月1回でも来て、役に立っていることが、とても重要なのだろうと思った。そのように思ってくれる人の気持ちをうまく汲み取っていくことが大切で、かつ、難しさも感じる。

④ 熊本県立劇場

調査時期:2017年1月18日(水)14:00~16:00

インタビュー対象者:本田恵介(事務局長) 嶺浩子(アシスタントプロデューサー) 柏木陽(演劇百貨店代表/演劇家)

1. 調査施設の概要

◎ 音楽と舞台芸術の専門ホールを併せ持つ複合文化施設の先駆け

熊本県立劇場は、音楽と舞台芸術の専用ホールを併せ持つ複合文化施設として、我が国でも早い時期に開館した。施設の管理運営を行う財団を設立し、積極的に県民の文化振興を行っている。元 NHK アナウンサーの鈴木健二氏が館長を務めていたことで全国的に知られた。館長就任の依頼を受けた鈴木氏は、県内の市町村を隔々まで訪問し、その土地の歴史や文化の担い手と交流したことで、県と市町村のつながりを生み出した。

【インタビューの発言から】

- 熊本県立劇場は1992年12月開館した。クラシック音楽専用のコンサートホール(1,810席)と、舞台芸術にかなり特化された演劇ホール(1,172席)の2つの専用ホールを併用する、日本では初めての施設。その他に練習室や会議室がある。
- この劇場を管理するための財団を設立して開館当初から運営している。財団の目的には「県民の福祉及び文化の向上に寄与すること」が掲げられている。
- 現在展開しているような県全域との連携を意識し始めたのは、鈴木健二氏の館長就任(1988~98年)以降で、県内各地を鈴木氏が精力的に回ったことで、劇場の職員も市町村との連携を意識し始めた。



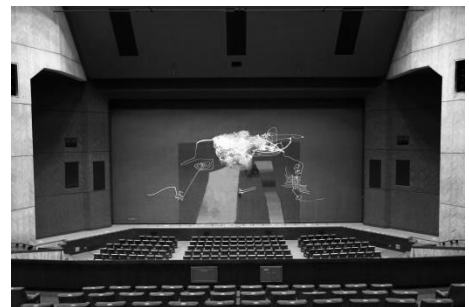
施設外観

◎ アウトリーチに必要な人材の継続的な研修

熊本県立劇場が高齢者を対象とした事業を展開するに至るまでの経緯は、およそ10年前に遡る。地域創造の研修事業に参加した職員が、演劇のアウトリーチについて学び、学校でのアウトリーチ活動が始まった。その経験から、障がいのある子どもたちとのワークショップの手法の開発が必要となり、さらに、高齢者へと対象を広げていき、継続的な研修を行っている。同時に、活動に関わる専門家や、教育、福祉、医療といった領域の機関につながりが生まれた。

【インタビューの発言から】

- 地域創造の「ステージラボ・マスターコース」で演劇のアウトリーチの事業企画の研修に熊本県立劇場の職員が参加したことがきっかけで、平田オリザ氏、吉野さつき氏、柏木陽氏を招いて、演劇ワークショップの研修を2008年から開始した。
- 地域創造や文部科学省の事業に申請しながら、県内の小学校で演劇のアウトリーチの活動を2008年から展開し、熊本大学の教育学部の学生や教員と一緒にファシリテーターの研修を行った。
- 学校現場でのアウトリーチを通じて、障害のある子どもたちとの演劇ワークショップの可能性を発掘するプロジェクトが立ち上がり、音楽家の片岡祐介氏も加えて障害者とのワークショップに取り組んだ。



演劇ホール

- 障害者から高齢者に対象を広げ、作業療法士の川口淳一氏に相談したところ、地元の熊本保健科学大学の教員とつないでいただいた結果、現在のような高齢者を対象とした事業に発展した。学校でのアウトリーチを始めてから、子ども、障害者、高齢者へと10年間の変遷がある。

2. 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容

◎ ファシリテーター等の要請、ワークショッププログラムの研究開発

熊本県立劇場では、「地域をむすぶアートプロジェクト」として地域とつながり、社会貢献プログラムを実践するために、ファシリテーターやコーディネーターの育成、及びワークショップ・プログラムの研究開発を実施している。高齢者施設や大学等と連携し、教育関係者や医療・福祉関係者とともに、デイケアサービスセンターや老人保健施設で演劇、音楽、ダンスのワークショップを行っている。高齢者の身体的な条件や認知症などの症状を考慮したワークショップを行いながら、高齢者とケアスタッフの新しい関わり方を作ることを目指している。

【インタビューの発言から】

- 高齢者の家庭以外の居場所は、病院、特別養護老人ホーム、デイケアサービスセンターと、幾つかあると思うが、個別の場所ではその場の付き合いだけになる。そうした場のひとつに、演劇を通じて「袖触れ合う」機会を生んでいる。
- デイケアサービスで言えば、ケアスタッフが充実していれば高齢者へのサービスも充実するが、ケアスタッフが疲れ果てていたら悪いサイクルが溜まっていく。ケアスタッフの人たちが、高齢者との新しい関わりを作ることも、私たちにできることだ。
- ケアスタッフから見ると、演劇はハードルが高く感じられるので、音楽やダンスも取り入れている。私たちは、演劇、音楽、ダンスの活動として行っているのであって、セラピーではない。そのあたりが、ケアスタッフと見方が違う面もある。



熊本保健科学大学作業療法士を目指す学生とのワークショップ

◎ 演劇ワークショップの手法を医療や介護の専門家に活用してもらおう

作業療法士や、作業療法士を目指す学生と一緒に演劇ワークショップをやりながら、ワークショップの手法を伝えている。演劇そのものの経験はなくても、一緒に演劇ワークショップを経験することで、そこで得たコミュニケーションゲームを介護施設の現場でのレクリエーションに活用してもらえる。施設でのレクリエーションは、医療や介護の点数がつかないため、活動の時間が減少しているが、高齢者のQOL(クオリティ・オブ・ライフ)という面でも貴重であるため、作業療法士や介護士に、少しでも演劇ワークショップのようなゲームを覚えてもらうためにやっている。

【インタビューの発言から】

- 例えば、「じゃんけんしましょう」と。「右手で握手して、左手でじゃんけんしてくださいね。じゃんけんに勝った人は、握手している右手で相手の手を強く握ってください。じゃんけんに負けたほうの人は右手を握られないように引き抜いてください。握ったら勝ち、握られたら負けです」というようなゲーム。
- 「教える」というよりは、「巻き込まれて」もらって、自分の中に1個でも2個でも記憶できたものを、自分の現場に持ち帰ってやってみる。そうすることで彼ら自身が応用しながら実践現場に活用してもらおう。
- 作業療法士の人に、ワークショップの様子を見て「いつもとは様子がまったく違う」と言う。普段は話しか



介護老人福祉施設で音楽ワークショップ

けても顔を上げない人が、顔を上げて何かを集中して見る、といった変化がある。100歳のおばあちゃんが踊りだすこともあるし、笑顔が増えた。そういう意味で、ある一定の成果を感じることもできたのではないか。

3. 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果

◎ 教育、福祉、医療など異なる領域の専門家とのネットワーク

熊本県立劇場では、子ども、障害者、高齢者といった様々な対象に演劇ワークショップを実践してきた。その成果が見えてきたのは、担当スタッフが一貫して継続的に取り組み、ワークショップの豊富な経験を持つアーティストや専門家と関わったことによる。また、教育、福祉、医療といった領域の異なる機関、団体、専門家の知見やノウハウを吸収しながらネットワークを広げてきた。そのことで、熊本県立劇場の新たな事業展開につながり、地域に対する役割を広げてきた。

【インタビューの発言から】

- 熊本保健科学大学の教員で、ストレスを専門に研究している方が、大学生を対象にした演劇ワークショップの活動前後のストレスチェックをした結果、効果があることが分かった。また、人と人との関係性を開く感性にとっても、演劇ワークショップは絶対に効果があるということをおっしゃっていた。
- ワークショップを行うにしても、福祉系や教育系の領域でやるためには、様々な団体や専門家と連携しなければ進めることはできない。それぞれ取り組む事業によって相手は変わるが、そういう人たちといかにうまく関わって、コーディネートし、結果に結びつけていくのかが、文化施設で働いている人間の役割かと思う。

4. 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点

◎ 中長期での取り組みを継続しながら、定期的に振り返ることの重要性

2016年4月に発生した熊本地震の影響で、それ以降は例年通りの予算執行が難しく、これまで続けてきた事業も見直しが図られている。従来のワークショップ関連の事業は職員の労力と時間を要するため、限られたスタッフ体制では長時間労働が常態化することが課題となっている。ワークショップ関連の事業などの取り組みを中長期で継続することは重要だが、同時に、終期を決めて区切りごとに成果や課題を振り返り、次の展開を考えていくことも必要である。

【インタビューの発言から】

- ワークショップ関連の事業は、財団の中でも必要だという認識はされているが、昨年4月に発生した熊本地震の影響もあり、今後の指定管理の見直し懸念されている。この事業の必要性をどう整理し、次に展開していくか、立ち止まって検討する必要がある。
- アウトリーチ系のも手のかかる事業が非常に多く、専門家や現場との調整が非常に多い。事業予算としては大きくないが、エネルギーと時間が費やされてしまう。
- 例えば高齢者施設で、演劇ワークショップの効果を測定するような研究を丁寧に行えば、数値的なエビデンスを得ることができるかもしれないが、熊本県立劇場が自らそうした研究を行うべきなのか、長期的視点で考えないといけないと思っている。

5. 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

◎ 文化・芸術による地域包括ケアシステムの可能性

熊本県では、福祉系、医療系のネットワークが強い。また、指定管理者も、地域の NPO や民間会社がほとんどである。県と市町村の文化施設が、福祉・医療の関係機関とつながれば、「文化・芸術による地域包括ケアシステムの構築が可能ではないか」とのイメージが膨らんでいる。子ども、障害者、高齢者といった多様な人々に演劇ワークショップを提供してきた経験から、企画担当者は、地域包括ケアシステムの推進が求められる今後の社会で、演劇ワークショップの可能性に大きな期待を寄せている。

【インタビューの発言から】

- 地域包括ケアシステムを推進するにしても、地域コミュニティが縮小していく中で、「自助」や「公助」が言われており、多様性を受け入れていかなくては社会が持続できない時代が来る。そのためにも、こうした演劇ワークショップが絶対に必要だし、使えると思う。
- 福祉や医療に携わる人たちの中には、直接まちづくりにも関わっている人もいる。文化・芸術に携わる私たちも、そこまで踏み込んでいくことが大事ではないか。
- 熊本県は地域のネットワークが強い。私たちも市町村に出かけることが多く、市町村ホールにこそ、こういった事業をやってもらえるような仕組みをつくるのが大事ではないかと思っている。
- 予算規模は小さくてもいい。市町村のホールに子どもや高齢者に来てもらってアート活動をするとか、そういう仕組みを提案していきたい。そのためにも、今度は市町村ホールの人たちと一緒に勉強会をしなくてはいけないと思う。

⑤ 静岡県舞台芸術センター(SPAC)

調査時期:2017年1月19日(木)10:00~12:00

インタビュー対象者:成島洋子(芸術局長) 仲村悠希(制作部) 永井健二(俳優)

1. 調査施設の概要

◎ 芸術監督制、専属劇団による創造型の劇場

静岡県静岡市を拠点としている公益財団法人静岡県舞台芸術センター・SPAC(以下、SPAC)は、1997年に設立された。芸術監督制度を導入し、専属の劇団を有する創造型の劇場として、静岡芸術劇場と静岡県舞台芸術公園を運営しており、現在、宮城聡氏が芸術総監督を務めている。SPACでは、俳優、制作、創作技術、文芸など総勢70名の体制となっている。

【インタビューの発言から】

- SPACは県が設立した公益財団法人で、静岡芸術劇場と、静岡県舞台芸術公園を拠点に演劇の創造活動を行っている。
- 劇場を専有使用しており、そこに専属劇団として俳優、舞台技術スタッフ、制作スタッフを独自に持っている形になる。
- SPACは1997年に設立し、静岡芸術劇場があるグランシップが開館したのは1999年で、日本平にある舞台芸術公園が整備されたのが1997年になる。



静岡芸術劇場の内観

◎ 演劇にアクセスしてもらうために事業の幅を広げたアウトリーチ

10年前に宮城氏が芸術総監督に就任して以来、様々な層に演劇にアクセスしてもらうチャンネルを増やしていくため、事業の幅が広がった。その一つがアウトリーチで、「リーディング・カフェ」という参加者の方が戯曲を声に出して読んでみるという、参加型のプログラムで、もう一つが「おはなし劇場」という、主に未就学児の子どもを持つ親子を対象に行っている。

【インタビューの発言から】

- 劇場の外に出て公演を行う機会など、いろいろと事業のメニューを広げてきた中で、アウトリーチも一つのメニューになっている。
- SPACの強みは、専属の俳優が実際にいること。普段、劇場で舞台上に立っている俳優が実際に外に出て行くことができる。
- 例えば、劇場の外で出会った俳優のファンになった人が、劇場に来るとまた舞台の上で会えるというように、俳優の顔がもっと浸透していくような方法の一つとしても行っている。



リーディング・カフェ

2. 高齢者を対象とした事業や運営の具体的な内容

◎ 高齢者学級への講師派遣

SPAC では、県内各地の公民館や地区センターなどが行う高齢者学級に、講師派遣形式のアウトリーチを実施している。SPAC 所属俳優が講師として赴いて、普段、俳優が芝居の舞台に立つときのエピソードをお話したり、発声練習を高齢者の方と一緒にやってみたり、ウォーミングアップやシアターゲームを少し取り入れたりして、最後に朗読を鑑賞していただく内容で、大体1時間半の長さとなっている。静岡県は広く、各市町の生涯学習センターが講座をやっているため、市町の文化振興財団や教育委員会などに、県の劇団として SPAC を利用・活用してもらうようにアピールしている。

【インタビューの発言から】

- 当初、沼津市の高齢者学級から依頼を受けて行ったもので、沼津市以外の、静岡市内や他の地域など、ご希望があれば出向いている。
- 都市の中心部から離れるほど、移動手段がないために遠出をしない方が、地区の公民館で月1回集まって、他の高齢者の方とお話をするために通われている方もいらっしゃる。
- 実際のところ、地域に高齢者学級に行くことは、高齢者に劇場まで足を運んでもらうことよりも、SPAC の活動を知ってもらうことが重要だと感じている。
- 沼津市では来年度、沼津市民文化センターのホールで朗読パフォーマンスのようなものを、500～600人ぐらいの受講生みんなで見たいという依頼があった。
- 静岡市の生涯学習センターの高齢者学級でもパフォーマンスの依頼があり、楽器演奏を加えるなど工夫した。各市町村に、ソフトの提供面で SPAC を活用してもらえればと思っている。

◎ 観劇バスの運行

SPAC は「観劇バス」というサービスを提供しており、公演チケットを予約すれば、無料でバスに乗車できる。東部地区と西部地区に分けて静岡芸術劇場までバスを運行しており、東部は修善寺が出発地で、三島駅、沼津駅を経由して劇場まで。西部は浜松駅前から劇場まで。演目によって東部と西部を交互にしながら運行している。高齢者の場合、バスの案内をすると公演への関心が高くなる。

【インタビューの発言から】

- 例えば、沼津方面の方は、沼津駅まで出ただけであれば、SPAC のバスが迎えに来て、観客をお乗せして劇場前まで送り、観劇が終わった後は、またバスが沼津駅まで送る。
- 高齢者の方はロコミの影響が強く、1人ではなかなか来ない。もし1人の人が「行きたい」となれば2～3人連れてきてくださるといことが結構ある。
- バスの運行情報自体が行き届いていないことが課題だが、県内に劇場までの無料バスを運行させているホール、劇場は、他にはないと思う。

◎ リーディング・カフェ

俳優が参加者と一緒に演劇の台本を読むプログラム「リーディング・カフェ」は、カフェやギャラリーなど、様々なところで開催している。静岡市の高齢者学級「みのり大学」でも実施し、63名が参加した。リーディング・カフェは年間30回から35回ぐらいのペースで、県内各地で開催している。SPAC 主催だが、集まる参加者は、やはりお店とつながりのある方が多いため、お店の協力抜きには実現できないプログラムでもある。

【インタビューの発言から】

- 普通のリーディング・カフェでも高齢者の方が参加することは多いので、日頃から、台本を用意する際も、文字の大きな台本を用意している。

- 高齢者の方は、体力的に疲れてしまっ集中力が持たないこともあると思うので、1つの作品をじっくり楽しむというよりは、声に出して読むことを楽しむということに目的を変えたりもしている。
- 静岡市の高齢者学級担当の方から、集中力が持たないので時間全部をリーディングにするのは厳しいと言われたが、それが杞憂に終わり、「皆さん元気に活発に読んでらっしゃって意外でした」という声を聞いた。



リーディング・カフェ

3. 高齢者を対象とした事業や運営における成果や波及効果

◎ 認知の向上、演劇との親近感の醸成

高齢者を対象とする事業や取り組みを通じて、SPAC や俳優に対して一般の人々が持っている「違う世界の人」というイメージから、一歩踏み込んで、親近感を感じていただき、演劇が敷居の高いものではないことをアピールしている。スタッフはこうした取り組みを通して、徐々に SPAC の認知度が向上し、演劇に興味を持ち、SPAC に対する親近感が醸成されている手応えを感じ始めている。

【インタビューの発言から】

- 初めに「SPAC って聞いたことある人？」と言って聞かすが、なかなか手が挙がらないことが多い。そうした人たちに、少しでも知ってもらえることはすごくありがたいと思う。
- 簡単な30分ぐらいの朗読パフォーマンスでも、満足されて「ありがとうございます」とおっしゃっていただく方も結構いらっしゃるの、以前よりも演劇というものに関心や興味を持ってもらえていることは確実ではないかと思う。
- 舞台や俳優と聞くと、自分の日常と違う世界に住んでいる人たちというイメージを持たれるが、そこは「地続き」なのだということを伝えている。
- 「皆さんも、普段生活する中で、孫と話すとき、好きな人と話しているとき、それぞれに応じて自分を使い分けていますよね。皆さんも無意識のうちに『演じる』ということをやっていますよ」と言っている。

◎ 高齢者によるボランティアスタッフ

発足当初は若い層が中心だったボランティアスタッフだが、シニアのボランティアの取りまとめ団体にアプローチして高齢者の参加を増強した。現在、ボランティアはシニア層に支えられている。高齢者の場合、連絡手段がメールでは難しい人が多く、手紙でのやりとりが必要になったり、体調が変化して急遽シフトの変更が必要になったりする場合もある。それでも、高齢者の方々が持っている地域のネットワークや献身的なサポートは、劇場にとって大きな力となっている。

【インタビューの発言から】

- ボランティアでカフェをお手伝いしてもらう方から、「若いときに、自分の家でカフェをやっていた。その当時を思い出して若返った」というようなことを言ってくださったりする。
- ボランティアにも参加している方に、「お知り合いのお店にポスターを貼ってください」とお願いすると、普段からつながりがあるから、ポスターをたくさん持って帰ってくれて、本当にありがたいと思う。
- 高齢者の方は、どうしても急に体調が悪くなったりするので、やりたいと言っていたけれども、その日に「ごめんなさい、体調が悪くなってしまった」ということも多々ある。そこは、その可能性を考えてこちらも準備したり人員シフトを配置している。



カフェを手伝うボランティアスタッフ

◎ 演劇の体験意欲、創作意欲の向上

演劇ワークショップなどに参加する高齢者もいて、演劇の体験意欲や創作意欲が旺盛な方も多い。そうした方は、観客としても重要な存在でもある。また、若手の演出家による本格的な演劇作品に、演劇経験のない高齢者に出演を依頼し、実際公演に出演していただいた事例もある。

【インタビューの発言から】

- ボランティアスタッフの高齢者の方が「戯曲を書いてみたいが、どうしたらいいか教えてほしい」と言われたこともあった。そういうことを、どこに相談すればいいか迷ったときに、劇場に来てくれることはありがたいと思う。
- 「県民参加体験創作劇場」の参加者の中でも一番年上の方は、その後、市内のアマチュア劇団に入団された。もともと声楽をやっている方ではあるが、現在は女優として舞台に立っていらっしゃる。



新進気鋭の演出家・タニノクロウ氏による『エクスターズ』に高齢者の方が出演

4. 高齢者を対象とした事業や運営における課題や問題点

◎ 駐車場と施設間の徒歩距離や段差、台詞の聴き取りを補助する字幕

日本平にある舞台芸術公園では、車を降りてからの距離と階段や、野外劇場での上演の際、気温や天候によっては高齢者には厳しい環境であることが課題である。また、高齢者には聴覚が弱いために台詞を聴き取りにくい方もいるが、日本語上演でも字幕をつけることで、鑑賞の補助になったケースがある。いずれも、アクセシビリティの課題であり、高齢者だけでなく障害者にも共通している。

【インタビューの発言から】

- 舞台芸術公園は最寄駅から距離があり、車を使うことが多いが、ロータリーや駐車場から劇場までの徒歩移動の距離が長く、階段を使わなければならない箇所があるため、高齢者には不便を感じる方もいる。
- ゴールデンウィーク期間に開催する「ふじのくに⇒せかい演劇祭」では舞台芸術公園の野外劇場で上演する場合もあるが、夜の公演や天候によっては気温が低く、高齢者の方や障害を持つ方にはハードルが高い。
- 日本語で上演している演劇の公演でも、高齢者の方には台詞が聴き取りにくい方もいる。以前、訪日および在日外国人観客のためにポータブル字幕を導入した公演があったが、その際に日本語字幕も併用したので高齢者の方にも勧めてみたところ、とても喜ばれたことがある。

◎ 高齢者が読みやすい文字サイズと情報伝達手段の工夫

インターネットの普及により、劇場や演劇公演の情報もウェブサイトを活用することが増えているが、高齢者に対する広報手段としては、チラシなどの紙媒体が従来と変わらず非常に重要となっている。情報を高齢者に届けやすくするために、チラシの文字量や文字サイズに配慮したり、別途、高齢者向けの情報だけを抽出したチラシを作成するといった工夫がされている。

【インタビューの発言から】

- SPAC の観劇バスにしても、チラシには情報を掲載しているが、チラシ全体の情報量がすごく多いために、どうしても文字が小さくなってしまい、気付いていないことが考えられる。バスのことやゆうゆう割引（60歳以上対象の割引）などの、高齢者向け情報をピックアップしたチラシを別途作って高齢者対象に配布している。
- 「詳しくはウェブで」としてインターネットに情報を集約してしまうと高齢者の方には難しいので、どうしても高齢者向けに紙媒体を別に用意するといった手間は必要になる。

5. 高齢社会における公立文化施設の役割、文化・芸術と高齢者との関わり方

◎ 高齢社会に向けて公立文化施設ができることを発信、ネットワークを形成

現時点での SPAC は、高齢者を対象としたプログラムを単独で自主的に行っているというよりは、社会の要望を受けて、手探り状態で始めたところではある。今後は、逆に SPAC から高齢社会に向けてできることを発信したいと考えており、そのためにも、地域の民間の福祉系の団体との連携・協力を積極的に働きかけ、ネットワークを広げようとしている。

【インタビューの発言から】

- 高齢社会、あるいは高齢者に限定したことではないが、劇場を開いていくことは本当にやらなければいけないミッションだと私たちは思っている。民間で、例えば特別養護老人ホームに出張パフォーマンスを行った際、運営会社からもすごく関心を持っていただいた。
- 劇場に入るにはチケット代が必要であり、2時間客席に座ってもらわなければならないので、それなりに敷居やハードルはある。ただ、演劇が好きな人だけの場ではないようにしたい。

◎ 先入観を取り払って考えるべき「高齢者が求める演目とは何か」

高齢者に向けたプログラムやサービスに取り組み始めた中で、SPAC のミッションである演劇の創造活動において「どのような演劇を高齢者は求めているのか」ということを、改めて考え直す契機にもなっている。「高齢者だからこういうものが好きだろう」といった先入観を取り払い、興味を持っていただくためには、どのような演目がいいのか、自問している。

【インタビューの発言から】

- 高齢者の身体的なケアや、高齢者に向けたサービスの改善についてはイメージができるが、高齢者はどんな演劇を観たいと思っているのだろうか。
- 何となくこちらが勝手に「高齢者には、こういう演目が好まれるだろう」というイメージを持つことはあるが、果たしてそれが本当に高齢者が望んでいるものかどうか、分からない。
- 「高齢者」を一括りにしようと思えばできるが、その中にもいろいろな考え方や価値観の人がいる。例えば70代といっても、若々しく元気な方もいれば、お亡くなりになる方が増える年代でもある。
- 高齢者の方たちが普段どういうものに興味を持ち、SPAC としてどういうものを提示すれば、見たい、行ってみたいと思うのか、それを、どのようにすれば知ることができるのかを考えている。

3. 専門家座談会

(1) 専門家座談会の実施概要

専門家座談会では、高齢者福祉や公立文化施設に関する専門家による座談会を開催し、高齢社会における公立文化施設の役割や方向性、事業や運営に関する留意事項などに関する意見の聴取、交換を行った。

[専門家座談会参加者]

	氏名	所属・肩書き
第1回専門家座談会	澤岡詩野	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 主任研究員
	白石光隆	ピアニスト
	菅原直樹	「老いと演劇」OiBokkeShi 主宰 俳優／介護福祉士
	吉野さつき	愛知大学文学部人文社会学科 准教授
第2回専門家座談会	新井英夫	ダンス・アーティスト／体奏家
	坂倉杏介	東京都市大学都市生活学部 准教授
	大月ヒロ子	有限会社アイデア 代表取締役
	三ツ木紀英	特定非営利活動法人芸術資源開発機構 代表理事
	淡路由紀子	グレイスヴィルまいづる 施設長

※敬称略(所属・肩書きは委員就任当時)

専門家座談会では、次のような内容を質問した。

- 高齢者を意識した文化・芸術活動(鑑賞型、参加型)の活動事例
- 高齢者にとっての文化・芸術活動の意義、成果や効果
- 高齢者を意識した文化・芸術活動における課題や留意すべき事項
- 高齢社会における公立文化施設の取り組みについての展望や意見

(2) 専門家座談会の議論要旨

① 第1回専門家座談会

◎ 高齢者を意識した文化・芸術活動(鑑賞型、参加型)の活動事例

音楽の事例では、高齢者の観客が多いコンサートで、より一層鑑賞を楽しめるために、例えば、プログラムを工夫したり、曲目解説のトークを加えたり、華やかな衣裳を用いるといった演出を加えることがある。また、高齢者の日常生活に、音楽に気軽に触れられる機会や、様々な健康状態や経済的状況の高齢者に寄り添うような、鑑賞や参加の機会を設けている事例がある。

【座談会での発言から】

- 自分の活動の中で高齢者に対してという現場としては、病院、それからいわゆる高齢者施設。元気な高齢者が多い。社会的にもそういうことに目を向ける施設も多くなってきている気はする。コンサートを考えたときに、たくさんのお年寄りが来ると思われると、やはりプログラム作りや衣裳なども考える。衣裳は色目の明るいシャツや、最近は柄のついたシャツに白いズボンが一番多い。コンサートは最近 MC が入ることが多いので、伝えたい曲をただ弾くのではなくて、この曲のちょっとした聞きどころのようなことを話して演奏する。
- 武蔵野市では「認知症高齢者見守り支援事業」として、認知症の方を対象に、ホームヘルパーを派遣して見守りや外出支援などの有償サービスをしている。例えば、むかし旦那さんと行った喫茶店におしゃれをして行きたいとか。かつてピアノをずっとやっていた方が、ピアノの演奏を連弾でまた弾きたいとか。それはおそらく文化的、社会的な部分だが、お年寄りがそうした希望を持って「そんなことを言って」みたいに終わっていたところを、サービスを提供する制度によって、とても生き生きとしたという話も伺っている。

演劇の事例では、演劇ワークショップで用いられるシアターゲームの手法を取り入れて、お年寄りや介護関係者とのワークショップや集団創作の事例がある。「演技の考え方や方法を身に付けることで、認知症のお年寄りとの関わりが円滑になる」、「演劇をつくることで、結果として介護予防につながる可能性がある」など、高齢者への波及的な効果を期待する意見もある。

【座談会での発言から】

- 演劇体験を通じて認知症のお年寄りとの関わり方を考えていただく演劇ワークショップで、介護関係者向けだったり、地域のお年寄りにも参加していただいたりしている。最初は体を使った遊びをする。これは「遊びリテーション」と呼ばれる、演劇ワークショップのシアターゲームのようなもので、介護の現場でも実際に行われているものだ。そのあとは、「ぼけと演技」というテーマで認知症のお年寄りとの関わりに演技は有効なのかということシアターゲームを交えて皆さんに体験していただく。
- もう1つの演劇でのアプローチは、介護者向けのワークショップで、お年寄りも交えて集団創作をする。認知症になったお年寄りが、人生を振り返って演じるというプログラムになっている。お年寄りの人生をひもどくことによって介護や支援のヒントが増えることもあるので、そういったこともワークショップを通じて参加者の方々に考えてもらえたらと思っている。それはとてもクリエイティブな仕事である。演劇ワークショップを通じて介護の仕事の面白さや魅力を発信できたらと思っている。
- 劇団「老いと演劇 OiBokkeShi」というものを主宰して、現在90歳になる男性のお年寄り、集団創作による演劇をつくっている。それによって、せりふ覚えて頭も使うし体も使い、いろいろな世代の人との交流が生まれるので、演劇をつくることで、介護予防と呼ばれていることを結果的にやっているが、そのお年寄りが演じるのは、認知症のお年寄り役で介護される立場の役である。

◎ 高齢者にとっての文化・芸術活動の意義、成果や効果

必ずしも高齢者の健康増進や介護予防といった目的で文化・芸術活動を行っているわけではない場合でも、高齢者が文化・芸術活動を行った結果、その波及効果として、身体的、精神的な変化が現れることがある。また、福祉や医療などの効果以外にも、ポジティブに「老いの受容」に向き合うことや、日々の生活の中に変化を与えている。日常と非日常をうまく分けられるような何かになる効果もあると考えられる。

【座談会での発言から】

- 特別養護老人ホームのさくら苑での共同作曲は、例えばリハビリテーションや音楽療法のような、ある種の効果があるということに全然考えずに入っていっていただけたとしても、結果的にそこにいるお年寄りの方たちにいろいろな変化が見られたというような感じの現場だったと思っている。
- 老いていく中で「こんな自分は駄目だ」といって深刻になって拒絶するのか、もしくは「人間なんてこんなものだ」といって笑って受け止めることができるかによって、その人の老いの姿はだいぶ変わってくる。だからこれから老いていく人たちにとって遊びというのはとても大切なのではないかと思う。
- 企業を退職された男性たちで、例えばコーラスをやっている方などは、体が悪くなっても舞台に出るために健康づくりに気をつけていたり、90歳を過ぎて片脚が不自由なのに、合唱の発表会にだけは行くという人がいる。やはり「集団の中で自分が一つのものをつくり出している」という役割やクリエイティブのようなものが、特に企業を退職した男性にはすごく有用だと感じている
- とある企業を退職した平均年齢83歳のOBグループは、歌、ダンス、手品など、各自が持つ特技を披露しに老人ホームやデイサービスへの慰問活動をしている。その活動の中で、「自分もこの先こうなるのだな」とか、「こういうふうにならねばならぬと、こんなにすてきに亡くなっていけるのだな」といった、「老いの受容」を日々学んでいるということをおっしゃっている。
- 「ちよいワルじいさんの会」というのを立ち上げた。その目的は、特に高齢男性の方は要介護状態や要支援状態になるとサービスを受けたがらずに孤立してしまいがちだという課題を克服するには、どうすればいいかということ、まだ元気なおじいさんたちに集まってもらっているいろいろな作戦を練ってもらうものだ。もしかしたら男性が好むような介護のあり方もあって、おじいさんたちの意見を聞きながらやっつけていこうとしている。
- 人間は最後まで社会的な生きものという意味では、オンとオフという、内と外がないとつらいだろう。老人ホームはおそらく内と外、オンとオフの区別が難しい。そういう意味では、音楽や舞台というものが、ご本人たちにとって日常と非日常をうまく分けられるような、何かになっているのではないか。

独自の表現を追求するアーティストや、企画制作に携わる人間にとって、高齢者との出会いは、新たな表現の創出や表現の深みを生む貴重な契機となっている。また、アーティストや企画制作者が、限りのある命を全うする高齢者と文化・芸術との出会いに立ち会うことで、社会における文化・芸術の存在意義を見つめ直すことにもつながっている。

【座談会での発言から】

- 横浜市の「さくら苑」という特別養護老人ホームで、作曲家の野村誠さんがお年寄りと一緒に歌や曲をその場で作っていく「共同作曲」という活動をしていた。その活動は、お年寄りのために何かしようと思って行き始めたというよりは、そこで作曲家が今まで出会ったことがない人たちと出会いながら新しい音楽を創造するとか、新しい音楽の創造につながる何かを一緒に発見していくという時間が、ほかでは得られない貴重なものだったので続いてしまったのである。
- OiBokkeShi の活動の成果は、高齢者と自分自身の演劇活動と双方向である。OiBokkeShi は、「演劇の知恵を介護現場に、介護現場の深みを演劇の稽古場に」という理念だ。高齢者の方々と出会うと、今まで出会っていなかった方々と出会えたような感じがしてとても興奮した。

- 認知症のお年寄りで、24時間寝たきりになって3、4年生きる人もいる。その部屋は時間が止まったような感じがする。私自身は「生きるとは何か」、「人間とは何か」ということを考えたし、演劇や文化の力をとても目の当たりにしたような気がした。
- どんな身体的な状況や生活の状況にあっても、本来は人としての尊厳を尊重され続けなければいけないのに、おそらくそれが成立していないことがきつと多い。それを尊重し、成立できるようにすることは、おそらく本当の意味で多様性みたいなことを考えることでもあるのかと思う。もう一つは、芸術や文化そのものの存在意義と、根幹と関わっているような気がする。音楽や演劇やダンスをするということは、どういうことだろう。アーティストにとってすごく根源的な問いのようなものも突きつけられる気がする。

◎ 高齢者を意識した文化・芸術活動における課題や留意すべき事項

高齢社会の進行や地域コミュニティの変化に伴い、高齢者の社会的孤立が課題になりつつある。そのため、今後、高齢者と文化・芸術とをつなぐコーディネーター的な役割の必要性が増すことが予想される。また、そうした社会背景に目を向けて、文化・芸術と福祉分野を横断するような幅広い視野を持つことが、文化施設にとっても重要である。

【座談会での発言から】

- 高齢者が文化・芸術活動に触れるためには、コーディネーター的な役割が必要になる。一つは文化施設の外につないでいくコーディネーター的な仕掛けの話で、高齢者が暮らしている場があって、例えばそこに地域の劇場が関わっていくことはあり得るが、まだ事例としてはおそらく少ない。
- より深刻な問題は、施設ではなく自宅で個々に引きこもってしまった場合。首都圏でも、まち全体が高齢化し、路線バスがなくなり、徐々に家で孤立化するお年寄りが増えているはずだ。そういった方たちが外に出ていくためのコーディネートや仕掛けをどうすればいいのか。これからきつとそれが必要になるだろう。
- 人口が減少している地域で、中学校の部活動が成立しづらいため、部活動などを文化センターのサークルと一緒にしてしまってもいいのではないかという意見がある。そこにお年寄りも参加して、子どもからお年寄りまで、文化センターが福祉や子育ての拠点になるというのも面白いのではないかと思う。
- 今の時代の地域包括ケアの視点から考えたときも、文化施設は一つの重要な接点で、福祉分野などとの連携をして、文化施設も一つの接点として有効活用すると考えていかないと、すごくもったいない。

高齢者に対して、文化・芸術に触れる機会を提供する方法を考えると同時に、高齢者の課題に対して、文化・芸術にはどのようなアプローチが可能かを考えることも大事である。高齢者介護の現場や職員の仕事を理解することや、一面的、短絡的に捉えずに、多様な高齢者のあり方を受け入れることが、文化・芸術と高齢者の出会いには重要である。

【座談会での発言から】

- 介護の現場では、医療が強くなってくると、どうしても保守的になってくる。健康に重きをおいて、文化をないがしろにされたりする。今、老人ホームはどんどん人手不足で効率的、効率優先の介護になってしまっている。ある面では「生かされている老人」になっても仕方がない。自分には本当に地方社会の縮図のようにも見えて、やはり文化・芸術というのはとても大切なのだと思っていた。
- 介護職の方で、演劇ワークショップなどをやりたいけれども、現場では時間に追われ、効率化を迫られ、上司や周囲の理解が得られなくて実践ができない。だから、実践されている場が施設でも増えるための環境づくりとも、人づくりからつながっている話ではないか。
- いろいろな介護職員がいて、介護という仕事に対して結構冷めている人たちも多いが、一定数は介護の仕事ですごく楽しんでやっている方々もいる。そういう方々はアートに対してとても理解があり、何か期待しているものがあるのではないか。そういう方々と、劇場の関係者の方がつながると、何かすごくいい試みができるのではないかと思う。介護関係者の中でも、アートはやはり大切だと言っている。

- やはり高齢者の方のことだけを区切って話ができないことだと強く思った。高齢化して虚弱化する前に、分からなくても発見があることを楽しんだり、面白いと思えることができれば、もっといろいろなところに行ってみたいという気持ちが蓄積されて育つ。そういう状況がつかれるのではないかと思う。
- 高齢者にとっての文化的な活動はすごく意義があることで、なくてはならないものだと思う。でも高齢者になって突然文化的な活動ができるわけではない。だから、文化的な活動ができる高齢者を子どもの時からつくっていくことが大事だ。地域創造にお世話になってアウトリーチを約20年続けているが、これは年々必要性を感じる。必要性を感じるとともに、まだ全然足りていないと思う。もっと広げなければいけないと思う。
- 老年学では、40代の価値観や活動が、高齢期やその後の価値観を決めてしまうという理論があるくらいなので、やはり40代までにいかに文化・芸術を好きになったり、真剣に取り組んだりする経験が重要だろう。

文化・芸術に対する高齢者のニーズはますます多様化しており、そうしたニーズに際限なく応えることは難しい。例えばハード面のバリアフリー化や、ソフト面の事業企画のプログラムなど、多様化するニーズにどこまで応えることができるのか、ハード、ソフト両面からの検討が重要である。

【座談会での発言から】

- 今は元気な高齢者が多く、安穏として「落語をやれば客は来る」、「演歌歌手をやれば客は来る」という話だったのかもしれないが、これからはどんどん後期高齢者が増加する中で、徐々に来られなくなり、若い世代も減少し、音楽や舞台に興味を持たないかもしれない。そのことを考えると、今、来てくれている観客のリピーターさんを、いかに長く来続けてもらえるのか、今からきちんと議論していかなければならない。
- 個々の価値観、関心、志向を集約することが難しく、ニーズの多様化に対応することも困難だが、高齢者が運営や企画に参画しているのかということと、ニーズをどういうふうに、積極的に文化施設の側から把握しようとするかというのはすごくつながっているのではないかと思う。やはり積極的に高齢者の声やニーズを聞いていくことが必要なのではないか。
- 施設のバリアフリー化も、どこまで対応すればいいのかをしっかりと考えていかなければならない。寝たきりでもストレッチャーで来られるのは理想だが、それは文化施設に求めることなのか。では何が必要なのかという話をしていかないと、バリアフリーやアクセシビリティにも、できること、できないことを峻別しなければならない。そういう意味では「虚弱化予防」という一つのキーワードが求められている話だと思うが、そこを逆算していったときに、どんなソフト、ハードが必要なのかを考える必要がある。

◎ 高齢社会における公立文化施設の取り組みについての展望や意見

ますます高齢化が進行する社会において、高齢者一人ひとりが文化・芸術を通じて、人間としての尊厳を持ち、社会的な自立が認められ、また社会に対する役割を見出せるような社会の形成が望まれる。そうした社会の実現に向けて、公立文化施設や文化・芸術にできることは、決して小さなものではない。

【座談会での発言から】

- 高齢者に何かを提供するというよりも、高齢者から教えてもらえて、それをこちらがありがたくいただくという関係を続けたいと思う。自己尊厳が満足すれば、やはり生きがいが出てくると思う。もちろん不自由なところはお手伝いするという方向性はいいと思うが、もっと高齢者の力を引き出すことによって、われわれもそういうことができる高齢者にならなければいけないという気もする。
- 認知症になっても、それなりの社会的な自立があるはずだ。それを本人が、介護は受けているけど社会的には自立しているという気持ちを最後まで持ち続けることが、おそらく人として本当に重要な部分だと考えている。文化や芸術は、小さいころから素養という面もあると思うが、贅沢ではなく、わがままでもなく、それを求めることは人生を豊かに生きるために重要な部分だということ、社会全体でもう少し受容していかなければならない。

- おそらく特別養護老人ホームのお年寄りは、何らかの役割を求めているのである。これまでの人生でサラリーマンやクリーニング屋さん、母親や父親、そういった役割を持ってこれまで生きてきたのである。しかし、定年退職して、老いて、老人ホームに入ることによって、徐々に役割を持つことができなくなってしまった。介護職員の仕事は、そのお年寄りに合った役割を見つけることだと思う。人は自分に合った役割を見つけると輝き出す。それはクリエイティブなのである。そのお年寄りの人生のストーリーに耳を傾けて、そのお年寄りに合った役割を見つけることは、とても大切だ。

高齢社会に向き合うことで、文化・芸術振興の意義や公立文化施設の役割について、改めて見直すことが重要である。その際に、文化・芸術振興という視点だけでなく、福祉、医療、地域づくりなど、他の政策領域の視点からも、文化・芸術がもたらす成果や効果を考えることで、地域社会における文化・芸術の存在価値を高めることが望ましい。

【座談会での発言から】

- 文化・芸術を余暇としての意味しか見ずに、「うちの自治体はそんな予算はない」というような話になってしまいがちだが、特に高齢の方に特化したキーワードでいえば、「介護予防」、「虚弱化予防」といった視点で、こういうコンサートや、文化施設にこういう方々が来られ続けることで、このような効果があると、今からでもエビデンスをとっていくということを誰かがしなければならない。
- 世代や障害の有無ではなく、どうつながる場所ができていくかということが大事で、その中で公立文化施設の役割というのは、アートといろいろな領域をつなげる拠点としての部分が大事になると強く感じている。それをどうすれば、行政の上層部の意識を変えたり、もしくは関心の高い議員が生まれるようになるということを考えなければならない。
- 行政の文化・芸術振興の担当者が、文化のことだけを見ているのではなくて、高齢者福祉、障害者福祉、教育など、やはり横串を通して、人がどのように社会に参加して関わり、その尊厳が守られ、文化的な生活が守られるとはどういうことかを考えていかなければならない。どこまで公立文化施設がやる必要があるのか、ないのかではなくて、より根底のところから、なぜ文化・芸術振興が必要なのかというところから、考えるべきかもしれない。

② 第2回専門家座談会

◎ 高齢者を意識した文化・芸術活動(鑑賞型、参加型)の活動事例

高齢者の参加が多いダンスや演劇などのワークショップの事例では、表現技術の向上や成果発表に向けた取り組みではなく、高齢者の居場所づくりや仲間づくりを大事にしていることが共通している。地域での文化・芸術活動が、高齢者の生活サイクルの中に浸透することで、他者との出会いや交流を通じて、孤立せずに地域と関わるきっかけを生むきっかけになっている。

【座談会での発言から】

- 地域創造の「現代ダンス活性化事業」がご縁になって、可見市文化創造センターalaで継続的に関わらせていただいている。高齢者に関わりのある事業では、「まち元気プロジェクト」というのがある。ダンスと演劇のワークショップを年間20回、高齢者が同じメンバーで毎週顔を合わせる。「今日はこういう体を使った表現で遊んでみよう」というもので、その場で完結する内容。4年目か5年目になるが、継続している方も新規で来る方もある程度いて、毎回20名ぐらいの方が来るようになってきている。目的は仲間づくりで、発表会はしない。
- 横浜市の旭区にある地域作業所「カブカブ」というところがある。1960年代の後半か70年代の初めに建った公団の団地がある地域で、ご老人の家庭か独居の方が圧倒的に多い。その団地の一角に地域作業所があり、カフェがある。所長の鈴木励滋さんという方は、「日々ここではワークショップが展開している」、「むしろ毎日が演劇なのだ」ということを言っている。福祉作業所が少しアートのことを入れて障害者と高齢者を巻き込みながらの場づくりは、公共ホールだからこそできる居場所づくりに似ている気がする。
- 東京都港区の芝地域で、「地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト」の拠点の「芝の家」は、いろいろな人が来てくれるような場所で、平均で日に40人弱ぐらい来る。お誘いして来るというより、お年寄りの生活サイクルの中に芝の家がある。芝の家は高齢者向けに、いろいろな形で音楽や体操をやりながら、他世代の人が関われる場をつくっている。

ワークショップやアートプロジェクトの中には、高齢者が「弱い立場」や「支えが必要な立場」としてではなく、高齢者と社会の関係性や枠組みを変化させたり転換させたりすることで、高齢者と周囲の人々との関係に変化を起こすような表現も試みられている。文化・芸術には、そうした人間関係への変化を起こす力があるのではないか。

【座談会での発言から】

- 廃材を使ったワークショップをアートプロダクトにする活動をしている中で、お年寄りと出会うことがある。「この地域はこうで、こういうことが盛んだっただけけれども、今はこうこうで」と、歴史、技術、産業についてお話ししてくれる。その方が生きてきた歴史や全てをきちんとものと一緒にセットで話してくれるのが、すごくいい時間である。
- NPO という立場で、場所もお金もなく、あるのは熱意だけで、高齢者を対象としたワークショップを2001年から2007年か08年にかけて熱心にやっていた。助成金などを得ながら、いろいろな高齢者施設で実験的なプログラムをやった。施設の職員がアーティストと一緒にワークショップすることで高齢者の人との関係性が変わっていったり、高齢者同士のコミュニケーションが豊かになっていったりことは見えてきた。
- 地域にアーティストが滞在して住民と何かを協働する事業があり、高齢者施設でダンサーの砂連尾理(じゃれお・おさむ)さんと高齢者が一緒にプロジェクトを実施した。認知症のお年寄りの人が参加し、ダンサーにシナリオはあるものの、基本的に指示や意図が通じにくい人たちとダンスの舞台をやった。詳しくは『老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉: ダンスのような、介護のような』(砂連尾理著、晶文社、2016年)という本をお読みいただきたいが、参加したお年寄りが楽しそうだったので、ワークショップを続けている。
- コンテンポラリーダンスは初めて見た時に、なぜこんなわけの分からないことを一生懸命やっている人がいるのだと思った。でも、ものすごいエネルギーを持っていて、ものすごく何かを発していると思った。そういう

力が福祉の現場や高齢社会と言われるところには本当になくて、こういう力が、今から日本人が生きていく上で必要になるのではないかというのが一番の刺激だ。

文化・芸術を通じて異なる世代間の対話や交流を生むような仕掛けをつくるワークショップやアートプロジェクトの事例もある。また、異なる世代間の対話や交流を仲介する「コミュニケーター」の人材育成では、その役割を高齢者が担うことも考えられている。異世代間の対話交流は、高齢者の生活の張りや生き甲斐にとって重要であるだけでなく、地域社会の持続可能性においても重要である。

【座談会での発言から】

- 滋賀県立大学地域社会部に上田洋平さんという若い先生が「ふるさと絵屏風」というプロジェクトをやっている。地域のおじいさん、おばあさんに昔を思い出してもらい、「どういう匂いを覚えているか、どういう味を覚えているか」といったことを聞き、だいたい2扇か4扇の絵屏風にする。絵屏風を描くのは大変だが、探せば地元で絵が趣味の人がいて、たくさん聞いたエピソードをリストにして地元の絵師が描く。そうすると絵の至るところにエピソードが埋め込まれた絵屏風ができて、これに基づいて、地域で昔の体験を知らない子どもたちにおじいさん、おばあさんがお話しする。
- 私が勤めている高齢者施設の中に、実は地域から要請があって、学童保育の場所がある。地域の人たちから、ここに24時間スタッフがいるので、子どもが「母親が残業で遅れた」と言って来てもいいし、「朝8時前にどうしても出勤しないと」という時もスタッフが開けてくれる。私も、高齢者の施設に子どもの声がするという事で来てもらえばいいという話でやっている。
- 神奈川県湯河原町での研究プロジェクトで、町と共同で地域の健康づくりに取り組んでいる。健康な状態から病気に至るまでのグラデーションの部分で「未病」と捉えて未病の状態を放置せず、意識して自分自身で元気になる生活習慣を見に付ける。多世代のつながりの多い人は未病に対応しやすくなるという仮説で、多世代が集まる居場所、拠点づくりに取り組んだ。
- 最近、アートコミュニケーターを育成するようなプロジェクトが、美術館拠点で増えてきているかと思う。プログラムの柱としては、対話型鑑賞の中で鑑賞する人との間に入って対話を促し、作品を見て鑑賞者と一緒におしゃべりをして、コミュニケーションをする「コミュニケーター」を育てている状況だ。できれば高齢者がやっていくプログラムにしたいということで始まっている。30代から60代、70代の方もおられる。コミュニケーターとしての研修を受けて、自分たちの練習をしながら子どもたちの対話につなげていくようになっている。

◎ 高齢者にとっての文化・芸術活動の意義、成果や効果

ワークショップに参加する高齢者は、その場に来ることで、社会的な立場や肩書から離れて「一個人としていられるような居場所」を求めている面もある。また、普段は福祉的な支援を受ける立場の高齢者が、文化・芸術が介在することで、支援する／されるという関係ではない、水平的な人間関係が形成される。そのことが、高齢者が自尊心を持って生きるきっかけにもなっている。

【座談会での発言から】

- 来ている方たちは居場所のような感じで、話し相手をすごく求めている。ワークショップの時は、ワークショップネームで呼んでいるが、最後まで本名を知らない。最近では仲良くなり気を許して住所交換もしているみたいだが、「あの人は町内会長だ」といった地域の肩書きではなく、いわゆる一個人として参加している良さがある。ワークショップネームのようなある種のフィルターがあることで、居場所になれると思う。劇場空間だから、それを許される。そこがまず公共ホールの強みだと思う。
- 介護施設にいるお年寄りもサービスされるだけの人間になってしまうと、それはものすごくつらくてしんどい。ダンスワークショップに参加してくれた女性のお年寄りがダンス公演に出演して、1週間、東京で一緒に過ごし、お互いにフィフティ・フィフティに対等の立場になった。アートの力があるとしたら、「仕掛ける側」と「される側」ではなく、人間関係をフラットにしてくれるところがあるのだろうか。

◎ 高齢者を意識した文化・芸術活動における課題や留意すべき事項

一言で「高齢者」と言っても、個々人の身体面、精神面、社会面の実状は多様であるため、一面的な先入観や既成概念で語らないようにすることが重要である。また、「高齢者の問題」と「高齢社会の問題」を区別して考えることが重要で、「高齢者の問題」には専門性や当事者の範囲があるものの、「高齢社会の問題」は、いかなる世代の人々にも当事者である。高齢社会における制度や環境変化に柔軟に対応する姿勢や、近視眼的にならずに将来を見据えた課題の設定が重要である。

【座談会での発言から】

- 一言で「高齢者」として括ること自体が乱暴かもしれない。「高齢者はこういう人たちだろう」と何となく思っているのだけれども、本当にさまざまで、すごく元気な人もいれば調子の悪い方もいる。それは若い人にも同じようにあると思う。高齢者をどう捉えるのか、イメージで語ってしまっただけではいけない気がする。
- 「高齢者の問題」と「高齢社会の問題」は、別問題だ。高齢者のケアや高齢者向けのプログラムをやる人は全員でやるわけにいかないが、高齢社会の問題は専門などに関わらず、誰もが当事者であるので、何らかの形で心の準備をしたり、アクションを取ったりすることが必要だろうと思っている。高齢者の問題と高齢社会の問題と分けて考えたほうが良いと思う。
- 私自身にとっての高齢社会の問題を具体的に言えば、現在の大学生たち、19歳から22歳ぐらいの年齢の人たちが、40年、50年後には60歳、70歳になっていく。イメージしなければいけないのは、現在の20歳前後の人が60歳、70歳になった時に、現在の60歳、70歳の人よりもさらに健やかで幸せに生きていける社会にしないとダメだと思う。それが高齢社会のイメージしやすい目標地点だ。
- 特別養護老人ホームは、国や地方公共団体の補助金を財源に整備された素晴らしい便利な施設だ。バリアフリーにできていたり、交流ホールを持っていたりするので、これを地域に還元しないのも申し訳ないという思いがある。「地域に開かれた施設づくりをしなさい」と言われるほど、こうした施設は開かれていないと思う。開いていないと、やはりケアも専門家の中で、たぶん独善的に固まってしまう。
- 音楽療法を取り入れている施設の人と話をしている、この4月から要介護の軽い人たちがなかなか来られなくなるような制度の変化があり、アウトリーチをしづらくなったり、関わり方も変わったりすることが考えられる。受け入れる側の施設のほうの状況も一定ではなく、時代につれて変わってしまっている。そこは知っておかなければいけないとすごく思う。

高齢者施設でのアウトリーチやワークショップを行う取り組みは、試験的、単発的に行われてきたが、未だに持続的に取り組む施設は多くはない。持続的な取り組みを社会に広げるための、人材や予算などの仕組みづくりが重要である。そうした取り組みの目的や趣旨について、文化・芸術と福祉の立場では、求められる成果や効果は必ずしも一致しないことを、認識しておく必要がある。

【座談会での発言から】

- 高齢者施設でアーティストがワークショップをする取り組みを、継続的に社会的に広げていくための仕組みづくりで、挫折した。実験ではなく仕組みにするにはどうするのか、という時に予算がない。そういったことに興味を持って経験を積むアーティストも、積極的に取り入れる施設も、いまだに少ない。そうした中、アーティストと一緒に高齢者施設にワークショップを届ける活動は、現在はほぼストップしている状態だ。
- 最近では、アーティストが講師になって施設の中に直接入って行くのではなく、学生や地域の人たちがアーティストとワークショップをして学びながら、自分たちがワークショップをデザインし、実施する側として施設に入っていくような講座をしている。そうした中で、NPO が主体的にやるのは限界があるが、公共施設が今までの失敗や気を付けなければいけないことを活かし、拠点となって展開をしていく時代になってきているのかと思っている。

- 私たちが高齢者施設でワークショップをやる時は、まず施設のスタッフの方に講座という形でワークショップを体験してもらうことで、どの程度のことになり得るのか、予測できる心配を聞いておいて、その上で実施するような段階を取るようになっている。特に身体系のワークショップの場合は、飛び跳ねたりする方がいると、スタッフは「もし何か事故があれば」と心配して見ていることもあるので、すり合わせを事前に行っている。
- 例えば公共ホールがコーディネートして高齢者施設に行くこともある。そうすると、活動のミッションを福祉に置くのか、文化・芸術に置くのか、というようなことが重なる。普段やっているリハビリと同じになっては文化・芸術が置き去りになるし、逆に、完全に福祉から外れすぎても施設に入れない。いつもそこを揺れながらやっているという悩みがある。ただ、公共ホールからアーティストが来ることの意義がすべて失われてしまうと、「すぐに効果に直結すること」に応えるようなサービスになってしまうだろう。まったく応えなくていいのかというと、それも少し違う気がして、悩むことが多い。
- 実際、ダンスのワークショップに興味のある高齢者ばかりではなく、障害の重い人もいるのでみんなが参加しているわけではない。非常に分かりやすい踊りをしているわけではない。実際、認知症のお年寄りにもダンスを仕掛けて「何やっているのだ」と怒ってワークショップに来なくなった人もいる。参加者がまばらな活動にお金を投入しているようにも見られる。「『ケアや施設に効果がある』ということをお金で投入しにくくなる」と役所の先輩に最近言われたが、結果はさほど求めずに、現在は続けている。

◎ 高齢社会における公立文化施設の取り組みについての展望や意見

これからの高齢社会における高齢者自身のあり方が、文化・芸術や福祉のサービスの受け手としてだけでなく、自らの手でサービスの作り手、担い手になっていくことが考えられる。高齢者を核として、幅広い世代が地域とのつながりを実感でき、異なる世代間のつながりを実感できるような地域社会にするためにも、公立文化施設の役割に大きな期待が寄せられている。

【座談会での発言から】

- 自分が高齢者になった時を妄想すると、自分たちで楽しく生きるセンターをつくるしかないと思っている。高齢化したアーティスト同士で共同生活をして、夜、寝られない人がパーティーをやり、朝、早く起きる人がカフェをやりながら、公共ホールのスタッフを高齢者で固める。公共ホールが高齢者にサービスをするのではなく、高齢者が公共ホールのサービスを自ら生み出すために入って来ざるを得ないような仕組み。
- アートはこの20年ぐらい作家の特権性などを自己否定しようとしていて、自発的な参加や参加型のプロジェクトを仕掛けるような実験があった。公共施設もそろそろそのフレーズに入って、職員が特権的に全部サービスを提供するのではなく、これまでサービスの受け手だと思われていた人が、自分たちでやった方が、よりふさわしいサービスを提供でき、その方が自分たちの求める公共施設に徐々に変わっていく未来もある。
- 「どこまで施設の扉を開けられるか」というのがやはり一番ネックなのではないか。「ここまではいいけれども、ここから先は駄目」といった現実があって、どこまで開けるかということが課題かと思う。「これぐらい開いてしまえばいいのに」と思うが、そう簡単ではないのが今の現実だ。しかし、将来的には変わっていかざるを得なくなるのではないかという気もする。
- 高齢社会の中で、公立文化施設が高齢者に対して何をすべきかという話になってくると、高齢者に対して一人一人が満足するためのコンテンツを提供し続けている場合ではないと思う。今の年寄りの個々人の満足や健康につながるかもしれないが、社会につながるには限らない。だから、これから本格的な高齢者になっていく人たちが、サービスの「消費者」のような受け手としてのあり方ではなく、自分たちが次の社会をつくっていく当事者としての役割を実感し、自分と地域のつながりや自分と上下の世代の人たちのつながりをちゃんと感じられるようにするのが、おそらく、公立の、しかも文化施設がこれからやっていくべきことだし、それを本当にやってほしいと思う。
- これからの本格的に高齢者になっていく人は、戦後生まれの「自己の利益最大化」の社会を生きてきた人が多い。この先の日本で、そうした価値観のもとで社会資源を使うべきだという考え方になると、持続可能な

社会にはならない。その時に、やはり文化施設こそ、自己の利益最大化のみを追求する価値観を変えるなど、より広い世界から関わられるような意識や行動を生み出せる場になってほしい。

高齢社会における公立文化施設の取り組みに関する調査研究 報告書

調査・発行 一般財団法人地域創造
〒107-0052 東京都港区赤坂2-9-11
オリックス赤坂2丁目ビル9F
tel. 03-5573-4066 fax. 03-5573-4060

調査受託 株式会社ニッセイ基礎研究所
芸術文化プロジェクト室
〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-7
tel. 03-3512-1799 fax. 03-5211-1084

発行日 平成29年3月

